

## 相克相生と栄枯盛衰

### —— 国際化・人工知能制覇時代の囲碁の変容と不易 (1)

夏 剛 ・ 夏 冰

#### 国際化時代の中の囲碁「3.5強」国・地域の群雄競合と相互促進

囲碁は天授の盤上遊戯ボード・ゲームであり、究極の頭脳競技である。

囲碁は数千年前から中国で発祥・普及し、朝鮮半島経由で日本に伝来した後は高度の発達を遂げ、江戸(1603~1868)・昭和(1926~89)時代に隆盛を呈し続けた。世界囲碁史上の2大黄金期を経て、日本1強体制下の非専業・専業アマチュア プロフェッショナル世界戦の創設(1979・88)に由って国際化時代に入り、更に中・韓両雄競合の最中の2016年に囲碁人工知能A Iの驚異的な進化で新紀元が訪れた。

専業世界戦の第1号と為る世界囲碁選手権・富士通杯(読売新聞社・日本棋院・関西棋院主催、日本文部省後援、富士通株式会社協賛)では、第1・2回(1988.4.2~9.3, 89.4.1~8.5)の武宮正樹(1951~ , 77年九段)優勝・林海峰(1942~ , 67年九段)準優勝は、主催国の独り勝ち(中国流で言う「独覇」=単独制覇)を強く印象付けた。反面、第1回の聶衛平(1952~ , 82年九段)3位・小林光一(同, 78年九段)4位、第2回チョフンヒョンの曹薫鉉(1953~ , 82年九段)3位・徐奉洙ソボンス(同, 86年九段)4位は、囲碁王国の日本に肉迫する新興老大国(造語)の中国と新興強国の韓国の急伸を示した。上海出身・台湾籍・日本棋院所属の林対聶の1局は台湾海峡兩岸の棋士に由る初の公式戦で、第3回優勝の林の重層的な立場は第4回優勝の趙治勳ちょうくん(1956~ , 81年九段)と共に、日本碁界の国際色の豊かさと世界碁界の相関の複雑さを思わせる。

第2号の応昌期杯しょう(通称「応氏杯」)世界専業囲碁選手権(中国語表記=「~職業囲碁錦標賽」)は、棋戦に名を冠す台湾の実業家・囲碁規則ルール研究家(1917~97)が私財を投じて発足させ、応昌期囲碁教育基金会(1983年成立)の主催で夏季五輪開催年に挙行する棋戦である。台中関係や主催者独創の「応氏規則」の使用等厄介な問題の為に調整が長引き、先駆的な世界戦創設の宣言(1987.8.18)の1年後の8月21日に漸く始まり、決勝5番碁の最終局(89.9.5)

は第2回富士通杯終了の1ヵ月後と為った。この際に政治的な対立を超越する囲碁の脱俗性を現す様に、国交の無い韓国の選手（曹薫鉉と日本棋院に所属し出身国を代表する趙治勲）は初めて中国入りし、林海峰と日本棋院の王立誠（1958～ ， 88年九段）・王銘琬（1961～ ， 同年八段， 92年九段）が中華台北代表として、全項目を通じて台湾の選手が中国で競技する第1例を作った。2回戦（8.23, 同じく北京）の勝者に由る曹対林， 聶衛平対藤沢秀行（本名保<sup>たもつ</sup>， 1925～2009, 63年九段）の準決勝の組み合わせは、日・中・韓・台各1名の分布が天意の如く世界「3.5強」（造語）国・地域の存在を示した。1988年11月20・22日に漢城<sup>ソウル</sup>（漢字表記は2005年より「首爾」に変更）で聶・曹が2-0で両大家を破り， 翌年の5番勝負（4.25・28, 杭州/5.2, 寧波/9.2・5, 新嘉坡<sup>シンガポール</sup>）は曹が制した。

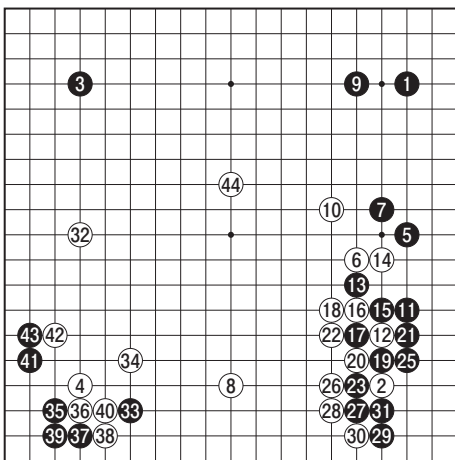
中国人に勝って欲しい気持ちを秘めた応昌期は聶衛平の35歳の誕生日の翌日に棋戦創立を発表し， 中国の首都， 浙江の省都と同省に在る故郷を1・2回戦と決勝の初戦～天王山の対局地に選んだ。唯一の純粋な韓国代表は自国への軽視に対する反撥<sup>アウェー</sup>から敵地（中国語＝「客场」<sup>ゲーム</sup>）試合で健闘し， 栄冠と史上最高の優勝賞金（富士通杯の1500万円の4倍弱に当る40万<sup>ドル</sup> [決勝最終日の為替相場は1<sup>ドル</sup>＝約147円]）を攫った。凱旋帰国の曹薫鉉は金浦国際空港から首都市内まで盛大な祝賀行進で熱狂的に歓迎され， 趙治勲八段の名人位奪取・韓国銀冠（文化勲章）受章（1980）以来の囲碁熱を引き起した。曹から次々と選手権を取り1995年に一時無冠に追い込んだ弟子の李昌鎬<sup>イチャンホ</sup>（1975～ ）は， 96年に世界戦・国際戦各2冠と一般棋戦8冠を獲り九段に推挙され銀冠を授けられ， 第1次と第2次の囲碁熱の間隔よりも短い7年ぶりに規模空前の第3次囲碁熱を呼び起した。英語のhistory（歴史）はラテン語<sup>ラテン</sup>のhistoria， 希臘語<sup>ギリシヤ</sup>のhistoría（調査で得た知識。過去を知ること）が語源で， 由来に有るhístōr（歴史 [知っている人， 又は分っている人]）とstory（物語）の複合（『小学館ランダムハウス英和大辞典第2版』 [小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会編， 1994] に拠る）も味わいが深い。名碁界の歴史（history）は男性・傑物中心の故に「彼の物語」（his story）である事が多く， 名棋士の偉業と大衆の尊崇が醸成した人気は韓国囲碁の不断の躍進の原動力を為して来た。

同時代の中国の囲碁熱は日中スーパー囲碁・NEC杯で劈頭<sup>へき</sup>から3連勝を果した快挙に由来し， 日本棋院・中国囲碁協会・『囲碁クラブ』/『週刊碁』（日本棋院発行月刊誌/機関紙， 初回/第2回以降）・新体育雑誌社主催， 朝日新聞社後援・NECグループ協賛のこの棋戦は， 中国語表記の「中日囲碁擂台賽<sup>からぬき</sup>（勝抜戦）」の通り両国の高手の団体戦で， 日本勢を立て続けに敗退させた結果は世界の頂上陣<sup>トップ</sup>の足元まで追いついた事を意味する。聶衛平は第1回（1984.10.6～85.11.20）で小林光一・加藤正夫（1947～2004, 78年九段推挙）・藤沢秀行の3人抜き， 第2回（1986.3.21～87.4.30）で片岡聡（1958～ ， 当時八段， 88年九段）・山城宏（同， 85年九段）・酒井猛（1948～ ， 81年九段）・武宮正樹・大竹英雄（1942～ ， 70年九段）の5人抜きを演じ， 第3回（87.5.2～88.3.14）の主将对決で加藤正夫を下し， 中国の8-7, 9-8, 9-8

での「**險勝**」(際疾い勝利)に決定的な貢献をした。彼はその殊勲に由って1988年3月26日に中国囲碁協会から「棋聖」の称号を贈られたが、中国史上初の至高の名誉の起点と為る85年の「抗日」戦勝は国中を沸かせ、「**中国囲碁勃興元年**」(造語)に起きた**囲碁熱**は次世代の人材育成にも深遠な影響を及ぼしている。「擂台賽効応(効果)」の「**紅利**」(特別配当)はそろそろ無くなるとういう2010年代前半に出た声は、裏を返せば一世一代の歴史的な大勝利に由る**囲碁熱**が中国で30年続き得る事の証である。

日本の史上初の社会現象化した囲碁熱は1930年代半ばの「新布石革命」に他ならず、中山典之(1932~2010, 92年六段, 歿後追贈七段)は『昭和囲碁風雲録』(上・下2巻, 岩波書店, 2003)第7章「新布石の誕生」第1節「燎原の火と燃える新布石」の中で、日本棋院1933年秋季大手合第1・2回戦(10.4~5・10~11)に於ける木谷實(1909~75, 56年九段)・呉清源(1914~2014, 50年九段推挙)が敢行した趣向(図1・2参照)を発端としている。「新聞碁が花相撲であり、棋士生命を賭けた大事な大手合の場で、時の花形棋士、木谷、呉両五段がアッと驚くような布石に出た」が、前代未聞の新機軸に衝撃を覚えた若手棋士は呉優勝1等・木谷優勝2等の好成績を見て、奇抜な布石を過激に試行する方向へ走り捲り碁界長老や一般人にまで新潮を広げた。2013年2月に中国の若き「力碁の雄」時越(1991~ )が第17回LG杯朝鮮日報世界棋王戦で優勝し、これに由り五段から九段に飛び級昇進し5月の戦績累積得点も初めて中国1位に達した。10月には第10回倡棋杯中国囲碁職業錦標賽(專業選手権戦)で国

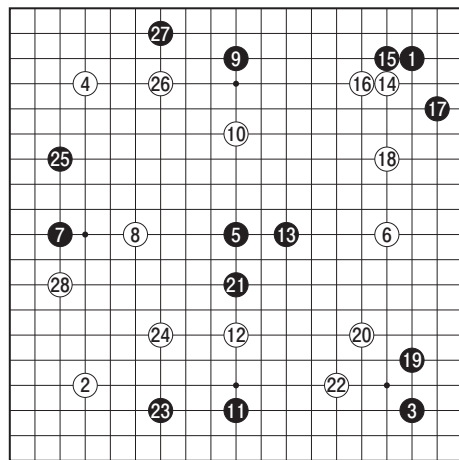
図1 日本棋院1933年秋季大手合1回戦, 木谷實五段 vs. 長谷川章五段(先番, 込無し), 第1~44手, 140手完, 白中押し勝ち



㊦劫取る (12)

図1・2 出典 = 『現代囲碁大系』第8巻『木谷實 上』第8局第1~3譜(83~85頁); 呉清源『増補・新装 呉清源打碁全集』第1巻「1926—1933(大正15年—昭和8年)」, 平凡社, 1997年, 452頁。

図2 日本棋院1933年秋季大手合2回戦, 呉清源五段 vs. 小杉丁四段(先相先, 先番), 第1~28手, 156手完, 白中押し勝ち



内の「重量級冠軍頭銜」（主要棋戦選手権の<sup>ビッグ・タイトル</sup>大冠）の初獲得を果し、6月から下落していた序列（2位→6位→3位→3位）はNo.1に戻り、以後2年弱の間に多少の後退（11月と翌年3・4月は2位）を除いて維持した。内外制覇の新王者の出現は氏名と「十月」の同音・同声調（shíyuè）に因んで「10月革命」と謳われたが、80年前の呉・木谷の「10月革命」は2015年8月を最後にして首位を失っている彼の比ではなく、**棋史に於ける意義は世界史の中の露西亞革命**（1917.11.7 [ユリウス暦 10.25]）に下らない。両旗手は年末に長野県地獄谷の温泉宿「後楽館」で<sup>スピード</sup>速度・中央重視の布陣法に就いて議論し、翌年1月に『棋道』（日本棋院機関誌、月刊）編集長安永一（1901～94、当時の四段〔昇段年未詳〕が最終段位で後に非專業に<sup>アマチュア</sup>転身）と共著の『圍棋革命 新布石法——三々・星・天元の運用』（平凡社）を世に問うた。新理論誕生で満天下騒然となる中で忽ち10万部売れた流行は棋史上の大記録を作り、**日本の囲碁の繁盛の背景には棋書・観戦記を含む活字文化の卓越な発達が見られる**。露西亞の10月革命に引っ掛けて言えば、日露戦争（1904～05）の勝因の1つが日本の兵隊の識字率の高さとされるが、「花相撲」と見做された新聞社主催の棋戦はその土壌で普及・向上に大いに寄与して来た。

安土桃山時代（1568～1600）頃の日本に於ける<sup>たがいせんおきし</sup>互先置石制から自由着手制への変革、本因坊跡目秀策（1829～62、俗姓桑原、幼名虎次郎）に由る<sup>スピード</sup>速度重視の「秀策流」先番布石法に次いで、**新布石革命は囲碁史上3番目の大きい進化**と言って可いから絶大の反響を起したわけである。行き過ぎへの反動かのように1936年から下火に為り木谷實は実利先行へと志向を変えたが、呉清源は33～56年に10回の10番碁で1回の勝ち越し直前の打ち切りと1回の負け越しを除いて、7人の高手を悉く一段下の先相先又は二段下の<sup>むこうせん</sup>向先に打ち込んで<sup>しま</sup>了い、その**超人的な棋力と華麗な棋風も新布石革命の非凡さを裏付け不朽の伝説を支えている**。呉と木谷は交通事故（1961.8.16）と2度目の脳溢血（63.12.27）の後遺症で65年に棋戦から<sup>とおの</sup>遠退いたが、呉の弟子林海峰は八段時代の同年に坂田栄男（1920～2010、55年九段）から名人位を奪った。『昭和囲碁風雲録』第22章「林海峰と木谷一門の時代」の第2節「旭日昇天、林海峰」に、「二十三歳の林海峰が無敵の大棋士坂田を破った時は、それは囲碁界を超えるほどの大ニュースだった。碁を知らぬミーちゃんやハーちゃんまでもが童顔の林海峰の名を口にし、“ハヤシ・カイホウさん。すてき”などと言ったのを想起する。碁界は、このように一人の新スターが出現するたびに大きくなって来たのである」と有る。坂田の一般棋戦29連勝（1963.10.11～64.7.29）の日本碁界最高記録と呼応する様に、将棋界で2017年6月26日に藤井聡太（2002～、16年四段）が公式戦29連勝の大記録を立てた。**超新星の爆発**は<sup>プロ</sup>專業入り直後の対加藤一二三（1940～、73年九段）戦（2016.12.24）に始まり、同じ中学生棋士の第1号と為る加藤の最年少記録（14歳7ヵ月）も5ヵ月ほど更新された。戦後日本の盤上遊戯で空前の注目を集めた早熟の神童は「凄い」「素敵」等の賛嘆を浴び、2017年6月20日に現役最高齢で引退した童顔・巨体・個性豊かな加藤も「ひふみん、可愛い」の喝采を博した。「聡太旋風」で起きた一大将

棋熟と比べて林名人誕生の反響は囲碁熟には至らなかったが、韓国・中国の後塵を拝す昨今の日本の落伍は囲碁熱が起り難い当世の碁界の体質にも一因が有る。

### 発祥地の中国の猛追・中興と400年王国の日本の独り勝ち→不振

『現代囲碁大系』(全47巻+別巻1冊, 編集主幹=林裕, 講談社, 1980~84) 第23巻『坂田栄男 下』(本人解説, 諸井憲二執筆, 1982) の第5局(第4期名人戦挑戦手合7番勝負第1局, 1965.7.29~30, 先番5日<sup>コミ</sup>込出し対林海峰)の解説「林海峯登場」で、坂田はこの昭和40年を囲碁界の一大転換とし、林の登場は単なる若き英雄の誕生ではなく若手棋士群を大いに刺激し、碁界の地図を次々に若草色に塗り替えて行く最初の一筆を下ろした、と評価する。「二十代の名人はあり得ない」というのが、それまでの碁界の通説であった。いや、私の持論でもあった。それは、私の歩いて来た道から、じかに伝わってきた体験論である。私は、まだ封建色の濃かった昭和初期に碁界入りし、二十代はその中で過ぎていった。はじめて本因坊の座についたのが四十一歳。名人の位は四十三歳であったが、世間も私もその年齢を当然のこととして受け止めた。一流になるには年季がかかるというのが常識だったのである。」「10年早い」という俗論の上に<sup>あぐら</sup>胡坐をかく感も有る彼は初戦で「横綱相撲」の余裕で楽勝し、第2局(8.8~9)で得意な地取り→凌ぎの戦法とは逆の実験に出て中央に模様を張ったが、余裕<sup>しやくしやく</sup>綽<sup>しやくしやく</sup>綽<sup>しやくしやく</sup>の試みが趣向倒れに終り以後1勝しか出来ず第6局(9.18~19)で失冠した。坂田は3年後の48歳時に本因坊位も林から取られ遂に無冠の九段の一員と為って<sup>しま</sup>了<sup>しま</sup>ったが、彼に次ぐ2人目の実力制名人・本因坊の林も1971年に本因坊位、3年後に名人位を失い、3人目の石田芳夫(1948~ , 70年七段, 73年八段, 翌年名人・本因坊就位に由り九段推挙)の登頂で王者低齡化の趨勢が定着した。木谷實門下の選手権獲得は1969年の大竹英雄の十段位が第1号で、石田の最上級棋戦優勝で勢いが付き7大棋戦時代(1976~ )に圧倒的な強さを見せた。

木谷實歿(1975.12.19)の翌年の全6冠(76.12.2~77.1.27に決勝が行われた棋聖戦は除く)制覇(加藤正夫2冠, 大竹英雄・武宮正樹・小林光一・趙治勲各1冠), 85~88年の連続4年7冠独占(小林10冠, 加藤8冠, 趙5冠, 武宮4冠, 大竹1冠)を遂げた上, 88~97年の日本人に由る世界戦優勝の6人・7期中4人・5期を占めた(武宮2冠, 趙・大竹・小林各1冠)。新布石革命初動の32年後に両名家の人的な布石が効力を発揮して次世代の制覇が始まり、更に32年後に小林の富士通杯優勝(1997)で日本は5年ぶりの同棋戦制覇に漕ぎ着けたが、木谷門下の次そして最後と為る世界選手権獲得(趙, 第8回三星<sup>サムソン</sup>火災杯世界<sup>オープン</sup>囲碁公開戦)の2003年には、一門の初の7大棋戦無冠(内5棋戦は決勝進出も無し)に転落し、翌年には初めて挑戦者<sup>ゼロ</sup>零と為り09~11, 15~16年にも同じ空白が現れた。2005~07年の趙治勲十段3連覇と孫弟子(小林の弟子)の河野臨(1981~ , 06年九段)の天元3連覇を最後に、木谷一

門の無冠は10年も続きその間の趙2回・河野5回の挑戦は例外無く退<sup>しりぞ</sup>かれた。木谷の3度目の脳溢血(1973.7.2)・療養と四谷木谷道場の閉鎖(74.6.3)で生じた損失は、1/3世紀(造語)後に次と次の世代の後退に現れ又2006年以降の日本の世界戦での不振にも投影した。

1989年の木谷門下に由る7冠独占の終了と世界戦に於ける日本の独り勝ちの打破は、同年1月7日の改元を境とした昭和の碁と平成の碁の背景や行方<sup>うきばり</sup>を浮彫<sup>うきぼり</sup>にしている。日本は富士通杯の第1~5回連続優勝の後1993~95年に世界戦無冠と為り、世界戦優勝総数は93年に同年3冠独占の韓国に7回対5回で天下一の座から<sup>ひ</sup>曳き下ろされた。終戦50周年から平成元年の冷戦終結後の日本の政治・経済等の「第2の敗戦」が囁かれたが、その直前の日本棋院創立70周年の節目に囲碁王国は決定的な弱体化に陥り敗勢を呈し始めた。1996年に依田紀基(1966~ , 93年九段)が第1回三星杯で「初物食い」に成功し、97・98年に小林光一・王立誠の第10回富士通杯・第2回LG杯優勝が続いたが、この3年の世界戦4冠は毎年3冠が韓国に取られ、<sup>プロ</sup>職業世界戦創設10周年の98年には日・韓の制覇累積回数は8対18と完全に圧倒された。王立誠の第2回春蘭杯世界囲碁選手権戦優勝(2000)と趙治勲の03年三星杯優勝の後、05年のLG杯で張栩(1980~ , 03年九段)が最後の日本棋士に由る世界制覇を遂げた。11回中4回は台湾勢、2回は韓国人が獲り半数未満の日本人優勝は1997年が最後なので、日本碁界の戦力導入・活用に感心しつつ純粋な日本の碁の実力を割り引く向きも出よう。

中国は1989年の応氏杯決勝での敗北に由って囲碁発祥国の面目を保てず3位に下がったが、95年の馬曉春(1964~ , 84年九段)の世界戦初優勝(富士通杯、第6回東洋証券杯世界選手権戦)で自信が湧いた。1993年3冠(上記2冠+第2回応氏杯)・94年2冠の韓国独占と95年2冠の中国独占は、後の韓国の99・2002・04年各4冠・01年5冠独占と中国の13年6冠・17年3冠独占の年度単独制覇の前奏曲と為った。中国は2000年1冠(俞斌<sup>ゆひん</sup>[1967~ , 91年九段], LG杯)の前・後各4年の無冠を経て、自国の長い暗黒時代と囲碁王国の悠久な黄金時代と反転する様に05年から毎年登頂し、09年には4冠獲得を以て優勝累積が14回と為り11回<sup>とど</sup>に止まった日本に逆転勝ちした。中国の囲碁の近代化は1909~10年の高部道平四段(1882~1951, 33年棋正社八段)訪中に発端し、中国の一流棋士は全て2子置碁で対戦したのに勝てなかったので<sup>せいぜい</sup>精々日本の<sup>アマ</sup>非專業初段に当り(陳祖徳主編[編集主幹]『中国囲碁史』[中国統計出版社, 1999]第2章「民国時代の囲碁」第2節「民国各時期の棋士とその棋力」の論断)、彼我の雲泥の差を見せ付けられた中国の碁界は衝撃の余り互先置石制の廃止に踏み切った。日本より400年余り遅れて自由着手制に移った後も碁界の実力は国力と連動して弱い儘で、清朝(1644~1911)崩壊後の中華民国(12年成立)の軍閥混戦・国(国民党)共(産党)内戦(27~37, 46~49)・抗日戦争(37~45), 中華人民共和国成立(49)後の朝鮮戦争(50~53)への参戦の後、漸く訪れた相対的な安定の状況下で57年に初の選手権戦とし

40 (238)

て全国囲碁個人賽(「賽」=戦)が発足した。1960年の中日囲碁交流の初戦から喫した半世紀前の苦杯以上の敗戦が奮起の契機と為り、苦節49年で到頭「赶超」(追い付き追い越すこと)の目標を完遂し100年の雪辱を果たした。

第1次日本囲碁使節団は団長の瀬越憲作(1889~1972, 42年八段推挙, 55年引退・名誉九段), 坂田栄男・橋本宇太郎(1907~94, 54年関西棋院九段)と瀬川良雄七段(1913~2001, 71年八段, 81年引退贈位九段)・鈴木五良六段(1917~95, 65年七段, 83年引退八段)から成り、中国の一流陣と先以上の格差で打ち32勝2敗1持碁と圧勝した。翌年の団は中国の水準に合わせて八段・七段・五段各1人+非專業強豪2人と格下げしたが、中国は新鋭陳祖徳(1944~2012, 82年九段)等の投入も空しく5勝34敗1持碁に終わった。特に女性の伊藤友恵五段(旧姓川田, 1907~87, 84年引退六段, 追贈七段)の8戦全勝は、陳祖徳が回顧録『超越自我』(自我を超越して。人民文学出版社[北京。以下同じ場合は首都所在の日本の出版社と同様に略す], 1986)で「国恥(国辱)とした。中国振興・打倒日本の目標で1961年に国家集訓隊(国家集中特訓選手団)が組成され、国家少年集訓隊と共に堅持して来た精鋭選抜の体制は世界での復権の土台を為している。読売新聞社主催の日中囲碁交流の31回(1965年女流非專業代表団は除く)の中で、恰度折り返し地点に当たる16回目(76)から中国の勝ち越しに転じ、最後の3回(90・91・92)は30年前の一辺倒と反転して中国の38勝18敗・35勝20敗1持碁・32勝24敗と為った。1975年までの日本の355勝173敗24持碁は絶対的な優位を示しながらも、中国の発憤に由り65年に初めて互先で日本の九段に勝ち(陳祖徳対岩田達明[1926~]), 翌年から平等を期して手合割は原則的に先(中国語=「讓先」)から互先(同=「分先」)と為った。日本の7大棋戦体制確立と中国の「文化大革命」(1966~76)終結の年からの逆回転に由って、後半は中国の483勝403敗18持碁1無勝負で日本の不成績が次第に固定化した。日本は往年の蓄積と合わせて758勝656敗42持碁1無勝負で依然として勝ち越しており、最終年の時点での世界戦優勝の日本5回対中国0回と同じく囲碁王国の余裕は否めないが、皮肉にも交流事業解消の年から日本は4年連続の世界戦無冠に陥り3年目に中国は初優勝した。

日本の名人戦発足の1961年は国家集訓隊の成立に由って中国の「囲碁中興元年」(造語)と為り、組織・制度の整備の布石として翌年の囲碁協会設立に続いて64年に段位制度が創設された。日本で高段の最下位に在る五段を最高位とした規定は伊藤友恵にも敵わぬ水準が背景に有り、日本棋院が1942年に中国最強の6人を四段と認定した事と照らしても碁界の進歩の遅さが分る。臥薪嘗胆を促す意図も込めて設定された低い最高位の4人も強豪僅少の実情に合うが、22年前と同数中の1位・4位だった過惕生(1907~90)・劉棣懐(1897~1979)は、第1・5回(1957・61)と第2・3回(58・59)全国個人戦で優勝した老大家でありながら、陳祖徳制覇の第6~8回(64・66・74)では6強に入れず後進の1強時代に身を引いた。四段13人中

7位の黄永吉（1927～2012）の第4回優勝時の33歳は次期の劉の62歳より大分若い<sup>だいぶん</sup>が、20歳の陳が第4・5回の3位・2位から23歳の林海峰の名人位奪冠の前年に王者と成った後、30歳超の戴冠は彼の連覇最終回と94年の曹大元（1962～，86年九段）の2回しか無い。陳が互先で岩田達明に勝った1965年10月25日は画期的な対日戦勝として歴史に刻まれ、彼は30歳以降1度も優勝歴が無いにも関わらず82年の段位再設定で九段の2位と認定された。格差を悪とする毛沢東（1893～1976）の無何有郷<sup>ユートピア</sup>の所為<sup>せい</sup>で段位制度は直ぐ有耶無耶<sup>うやむや</sup>に為り、「建国の父」が惹起した「文化大革命」の名の文化大破壊に由り国家集訓隊<sup>チーム</sup>は解散され、第10回全国個人戦も彼の死去に伴う自粛で中止し囲碁は独裁政治に翻弄され続けたが、絶え間無い新陳代謝の結果73年再建の集訓隊の新参者聶衛平<sup>チーム</sup>が75年に全国個人戦で優勝し、76年の対藤沢秀行天元・石田芳夫本因坊局で日本の選手権保持者に対する中国の金星を上げた。1982年に初代九段3人中1位と成った聶は85年の囲棋擂台賽<sup>スーパーステージ</sup>で日本の主将まで負かし、国内絶対覇者の威力を揮って中国の日本との強弱逆転の本格的な第1歩を踏み出した。

## 世界囲碁史上第2の黄金期の昭和の受難→繁栄と碁界の錬磨→玉成

神話を除く日本史上最長王朝の昭和は世界囲碁史上2番目に長い黄金期と為ったが、江戸の1/4弱に当る昭和の碁・碁界は20世紀の戦争・革命の投影の様な激突・波乱が多い。古今東西の囲碁人が蒙った単年度最大の受難は第2次世界大戦（1939～45）の末期に在り、米軍が繰り返した無差別空襲で日本棋院本館と呉清源・木谷實等の自宅が焼失した上で、45年8月6日に新型大量殺戮兵器<sup>りく</sup>の実戦検証を兼ねた史上初の核攻撃が広島市を襲い、爆心地から5キロ離れた近郊で行われた第3期本因坊戦挑戦試合6番勝負第2局の最中に、本因坊昭宇（橋本宇太郎七段）・挑戦者の岩本薫七段（1902～99、67年九段）・立会人の瀬越憲作八段が爆風の直撃を受け、生活難の中で食糧・場所を提供した広島支部長も瀬越の三男（中学生）も市内で被爆死した。最終日（3日目）の再開直後の原爆投下時（8時15分）の盤面は証言の錯綜で定説が無く、『昭和囲碁風雲録』第12章「原爆下の本因坊戦」第3節「きのこ雲の下で」に、「午前八時に対局再開。碁はこれより大ヨセに入ろうかというときだった。岩本氏の記憶によれば百六手目あたり。この白百六がまことに味のよい手で、この手が打てては、よもや負けはあるまいと思ったと橋本本因坊が後日に述べているが、この瞬間に人類史上最悪の瞬間が来た」と有るが、岩本は『囲碁を世界に——本因坊薫和回顧録』（講談社、1979）第4章「溜池時代」第6節「原爆下の本因坊戦」で、「八時過ぎに二日目までの手順を並べ終り盤に向っていると、いきなりピカッと光った」と記している。『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎 上』（本人解説、志智嘉九郎執筆、1980）の「原爆下の対局」（第17局解説の題）の第8・9譜（95～112、113～116）の解説「黒の攻撃」「原爆投下」の記述では、記録が無いので前日の打ち掛け42（240）



は白112手辺りで打ち継ごうとした時に原爆が襲来した。日本碁界の対局記録は伝統的に時間付けまで書き留め精確さが世界一であるが、記録係が居た当日の進行が時刻まで再現できない欠落は破壊・衝撃の大きさを物語っている。

第10譜(117~131)の解説「動揺した気持ち」には爆風直撃・対局中断の非常事態に続いて、午後に再開してからの手数に対する岩本薫の反省が紹介されている。黒119で120かその1路右に打っておけば勝つのは容易でないにしても微細な碁に為るが、何しろ原爆に見舞われた後なので気持ちが動揺していた様で、白120と打たれては負けがはっきりした、と言う。(図3参照) 岩本基金に由って終戦50周年にシアトルに落成した日本棋

院北米西部囲碁中心施設の外壁に、彼の国際的な囲碁の伝道師の被害を加害国に訴える様に原爆下の一戦の局面が掲げている。橋本宇太郎も原爆後遺症で頻りに嘔吐しそれ以来8月の対局を苦手とする様になったが、愛棋家の中国地方警察部長の厳命で対局場を市内から移ったお蔭で助かった3人は、盤上と同じ不死身の強靱さを発揮し碁界の戦後復興の中心的な役割を果たした。囲碁で最も難しい争いの「劫」は中国語で「劫難」(災難)等の意味で使う事が多いが、戦災中の大惨禍に遭いながら天祐を享けた3棋士の運命は昭和の碁の芯の堅さを思わせる。『橋本宇太郎 上』の自選25局中「原爆下の対局」の前の局(先相先・本因坊昭宇七段対先番・呉清源八段, 1943.12)と有り、随分たくさん打って来た碁の中で人に見てもらえるのはこの局ぐらいだと言う「珠玉篇」(解説の題)は、何時空襲が有るか分からない状況の下、火の気も無い棋院で厳寒に震えながら盤に向っていた凄まじい対局である。儒教の至聖(聖人に次ぐ賢人)孟子(名は軻, 紀元前372頃~前289)の名言が思い起されるが、『孟子』「告子章句下」に曰く、「天將降大任於斯人也, 必先苦其心志, 勞其筋骨, 餓其體膚, 空乏其身, 行拂亂其所為。所以動心忍性, 增益其所不能。」(天は將に大任を斯の人に降さんとする也, 必ず先ず其の心志を苦しめ, 其の筋骨を勞せしめ, 其の體膚を餓えしめ, 其の身を空乏にし, 行うところ其の為さんとする所に拂亂せしむ。心を動かし性を忍ばせ, 其の能くせざる所を増益せしむる所以なり。)

同じ主旨で「珠玉」を含む「艱難汝を玉にす」(艱難は人を玉[立派な物]にする)は、西

図3 第3期本因坊戦挑戦手合6番勝負第2局, 本因坊昭宇 vs. 岩本薫七段(先番), 第106~120手, 240手完, 白5目勝ち

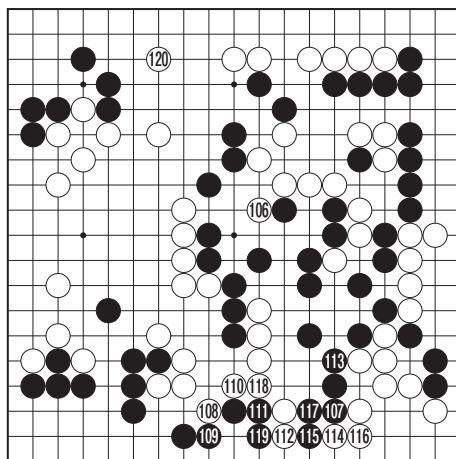


図3 出典 = 『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎 上』第17局第8~10譜(174~176頁)。

洋の諺 “Adversity makes men wise.” (逆境は人間を賢明にする) の巧みな意識である。『日本国語大辞典』第2版 (全13巻+別巻1冊, 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部編, 小学館, 2000~02) では, 当該熟語の用例 (3点) の初出は「小学読本 (1874) 〈榊原・那珂・稲垣〉四 “されば艱難汝を玉にすとも又人の徳慧術智あるものに恒に疾疾に存すともいへり”」と為る。【玉・珠・球】の成句項「たまなす」の「①玉のように立派である」には, 「浮世草子・好色一代女 (1686) 一・一」が出典に挙げられている。【玉成】(語釈=「(名)玉のように立派にみがき上げること。また, 立派にでき上がること。転じて, 完全な人間にしあげること」) は, 和文用例の代わりに「水滸伝・第四回」の出典を付けている。漢籍由来のこの単語は元 (1279~1368) 末・明 (1368~1644) 初の小説家施耐庵 (生歿年未詳) が著した彼の長篇の前に, 北宋 (960~1126) の哲学者張載 (1020~77) の「西銘」と南宋 (1127~1279) の文学者劉克莊 (1187~1269) の「順寧精舍記」に, 語源と思われる「玉汝於成」(汝を玉に成す) が出ており, 後者は前者の敷衍なので既に熟語と化していた様である。天地・人間性の「氣」に関する張の学説を好む温家宝 (1942~ , 2003~13年第6代総理) は, 四川省汶川大地震 (08.5.12) の翌月に隣省の陝西の被災地で高校受験直前の中学生を見舞う際, 激励を表すよう「艱難困苦, 玉汝於成」(「艱難困苦」=和製熟語「艱難辛苦」) と揮毫し, 又この格言を在任中の演説等で複数回引いて不屈の精神・堅忍の意志を提唱した<sup>1)</sup> が, 周恩来 (1898~1976, 49~76年初代総理) の持論の1つも「逆境は偉大な教師」である。ニクソン (1913~94, 69~74年アメリカ合衆国第37代大統領) は初訪中 (72.2.21~28) の際, 周から何度も聞かされたこの人生訓に普遍的な価値観・原理を覚えたのか日記と回想録に書き留めた。<sup>2)</sup>

創元社編集部編『新版日英比較ことわざ事典』(創元社, 2007) の「艱難汝を玉にす」の項に, 「意味」人は苦勞をなめ, 難儀に出会うことによって玉のようにみがかれ, 立派な人物になる, ということ」の後, 対応する英文の諺・和訳 (前出) が記され, 「類句」① In adversity men find eyes. [逆境に陥ると人間は目が開く] / ② No cross no crown. [十字架を負わなければ栄冠は得られない] / ③ It is the bridle and spur that makes a good horse. [馬を駿馬にするのは手綱と拍車である] / ④ The wind in one's face makes one wise. [顔にあたる風は人を賢くする] も有る。受難・錬磨を成熟・成功への前提・発条とする発想は「地球村」の東・西両洋で共通し, 例えば②は「南朝」宋 (420~79) の范曄 (398~445) 撰『後漢書』(432年頃成立) 「班超伝」の「不入虎穴, 焉得虎子」(虎穴に入らば虎子を得ず), ④の顔面直撃の風は『後漢書』「王覇伝」の「疾風知勁草」(疾風に勁草を知る) の疾風と通じる。「随筆・山中人饒舌 (1813) 上 “疾風見勁草-”」で日本語に入った後者は, 激しい風が吹いて初めて勁い草が見分けられる事から, 艱難に遭って初めて節操や意志の堅さが分る譬えに為るが, 苦難・事変・危機は情操・根性・能力の鍛練に由って優れた人間を作り上げる機能も持つ。

古今を問わず幾多の試練・障害・挫折を乗り越えて初めて立派な棋士に成る例は事欠かず,

この論断の中の文字に引っ掛けて入段試験で妨害された坂田栄男の蹉跌を先ず挙げよう。『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』(1980)の巻頭の入段記念手合(34.11.25~26, 『棋道』主催・翌年新年号掲載, 230手完, 黒2目勝ち)の解説「巢立ちの譜」で、初段格として花形棋士の呉清源五段に指導碁(2子局)を打ってもらう事の感激を表す前に、院生から入段者を決める同年の予選手合での体力負け事件に対する積怨を噴き出している。幼年から体が弱かった彼は院生同士の碁に時間制限の無い年1度の総当り戦で割を食って、頑健派の鈴木五良・五十川正雄(1915~72, 62年七段, 追贈八段)に撥ねられた。朝から打ち始めた碁が夜中になっても10手程度の進行だから粘り負けで落第の憂き目を見、この不条理を正すべく院生の手合にも時間制限を設けた翌年には優勝し晴れて入段した。鈴木は同時掲載の対岩本薫六段の3子局(同じ下手勝ち)や第1次訪中使節団の末席の通り坂田の格下で、後に親友であり続け坂田理事長時代(第8代, 1978~86)の前から理事として日本棋院の為に尽力していたが、打碁集の劈頭で大昔の仲間の悪戯を論う長恨は傷心の深さと大成の合理性を思わせる。

坂田栄男と親しい小説家江崎誠致(1922~2001)はその囲碁人生を描く実録文学『石の鼓動』(双葉社, 1973)の第4章「わんぱく仲間」第3節の中で、集中砲火で本命を潰す院生集団の「怪しからん」策略・演技の醜態を暴露・糾弾している。まんまと嵌められた事に泣いて悔しがる坂田の言い分を聞いて棋院の幹部は仰天し、多少の逸脱ならそれも専門の修業と聞き棄てにも出来ようが、彼が受けた被害はその儘放って置ける性質のものではないという認識で、早速理事会が開かれ次年度からの是正措置が決定された。予定より1年遅れた事は正真正銘の実力の世界では1年を棒に振った事には為らず、寧ろ雌伏の期間に耐える事が専門棋士の階段を駆け登って行く底力と成るものだ、と坂田の代弁者でもある著者は説く。「この世界に〈泣きがはいる〉という言葉がある。坂田はここでも、他の棋士になかった人間的な試練を一つ余計に受けた勘定である。つまり、それだけ泣きがはいて、彼の天性のはがねは、それだけ硬度を増したのだ。したがって五十川正雄と鈴木五良が坂田に与えた理不尽な暴行も、坂田にとって、彼が王者たる資格を形成して行く上に、貴重な滋養であったと感謝してよいのかもしれない。」**不当な盤外作戦で進路を遮られた事の不平を正当な盤外抗争(造語)で直訴し進路を開く挙動と共に、誰もが認める同輩中の随一の実力も次の挑戦で一挙に運命を変える結果に繋がった。**坂田の抜群の才能を熟知した棋院の対応が無ければ彼の進路は変わったのかも知れず、次の実力制名人・本因坊も狭き門の1歩前まで陥落が必至と為**り棋院の英断**に救われた。

『現代囲碁大系』第33巻『林海峯 上』(本人解説, 大石清夫執筆, 1980)の第2局(入段予選手合, 55.2.20)は、日本棋院関西総本部院生として入段決定予選総当りで同じ1級の早瀬弘(1937~2012, 84年九段)と争う一戦である。各4時間30分の持ち時間を相当使って死闘する中で林の白126の軽率な失着(図4参照)が敗北を招き、その手拍子と局後に教わった好手筋(図5参照)は今猶脳裏に焼き付いていると回顧する。関西に於ける初段採用は原則的

に1名なので1敗の差で6人中2位に居た林は観念したが、幸運にも異例の計らいで1位の早瀬及び天宅信雄（順位未詳）と共に認められた。晴れて檜舞台への登壇を許された林はもう疾っくの昔に入段を諦めていただけに、思いも寄らぬ嬉しい報に接した時は欣喜雀躍、手の舞い足の踏む所を知らぬ有様であったが、「働哭の一局」という解説の題から推測すれば断腸の思いで泣いた事も考えられよう。『NHK 囲碁講座』2014年2月号の記事「実は“おまけ”だった？ 林海峰名誉天元の入段秘話」に拠ると、院生師範の瀬川良雄が「林は今年の内容が良いから入段させてやってくれないか」と理事会に推薦した結果だと言う。若しこの年に入れなかったら、翌年に入れるかどうかも分からないし、もう台湾に帰されていたかも知れないと林は述懐したが、弟子の合格に満足せず林を強く推し非弟子の追加を実現させた瀬川は誠に純粋で心が広い。

図4 入段予選手合、林海峰 vs. 早瀬宏(先番), 第125~163手, 205手完, 黒中押し勝ち

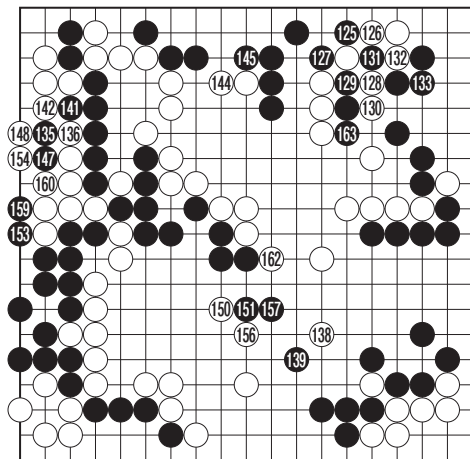


図5 前譜中の失着の白126に代る好手筋 (局後検討の結果)

図4の中、  
 152 劫取る (131の左)  
 155 同  
 158 同  
 161 各同  
 163 劫取る (131の左)  
 167 同  
 171 同  
 174 同  
 177 同  
 180 同  
 183 同  
 186 同  
 189 同  
 192 同  
 195 同  
 198 同  
 201 同  
 204 同  
 207 同  
 210 同  
 213 同  
 216 同  
 219 同  
 222 同  
 225 同  
 228 同  
 231 同  
 234 同  
 237 同  
 240 同  
 243 同  
 246 同  
 249 同

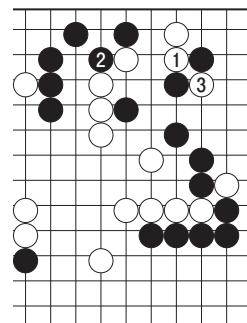


図4・5 出典 = 『現代囲碁大系』第33巻 『林海峰』第2局第16譜・16図 (30頁)。

天宅信雄（1934～，81年七段，2001年引退八段）の入段は30歳の年齢も考慮されたろうが、師匠の藤田梧郎（1902～94，90年七段，追贈八段）は林海峰の最初の師匠で奇妙な連環を為す。林の2番目の師匠呉清源の師匠瀬越憲作が率いた訪中使節団で坂田栄男が主力を務め、彼の入段を遅らせた鈴木五良と瀬越の孫弟子林の入段を早めた瀬川良雄の参加も奇縁である。瀬川の慧眼を証明する様に林は変則抜擢の10年・13年後に坂田栄男から名人・本因坊位を奪ったが、專業入りに当って1度地獄を見て天国に登った体験はこの両大家の人・碁の幅を広げた。『石の鼓動』の「プロローグ」第2節に坂田の本因坊失冠直後の傷心ぶりが活写されており、解説役で来ていた鈴木が古縄の如く泥酔した敗者の繰り言に付き合わされる羽目と為り、「何を！五良，馬鹿。劫に行けば僕が勝つてると言ってるだろう」と怒鳴られても逆らえなかった。

少年時代に前後した入段し仁義無き競争の後に仲直りした両者の苦渋と苦笑は微笑ましいが、稀代の鬼才が新潮の旗手に敗れた時に俱に居た事は激動・隆盛期に可く有る巡り合せである。

### 「泣き」・幸運の相互内包と雌伏→至福の明暗逆転の悲喜劇

ジャーナリスト  
報道人・作家の三好徹（本名河上雄三，1931～ ）は『五人の棋士』（講談社，1975）の第2篇「傲骨の棋士——坂田栄男」（初出＝『小説現代』72年3月号）で，本因坊昭宇に挑む第9期本因坊戦7番勝負第7局（51.6.27～28）の山場を克明に描いている。因縁じみた争碁の激闘の最終戦で坂田は歴史的な妙手の白128・130で優勢を占めた後，必勝の確信から本因坊就位後の雅号を考え始め着手も安全第一を期して消極的に為ったが，歴戦の橋本は白146の緩着の毛ほどの隙を見逃さず鋭い逆襲を展開して勝敗を逆転させた。「俗に，泣きが入った芸，というが，それはこういう痛切な体験を重ねることによって得られる。/この本因坊戦を機会に，坂田の芸には，泣きが入った。」この文に続く「それまで，棋士としての坂田は順風満帆だったとっていい」と齟齬して，後に「戦争が終り，インフレの時代がやつてきた。坂田は，前田，梶原，山部といった同志と共に，日本棋院を脱退して，囲碁新社を結成した。新社は二年ほどでつぶれるのだが，この時代，かれは呉清源と三番碁を打っている。手合いは，先相先。ストレート負けして，ここでも泣きが入った」と有る。3番碁（1948.2.29～5.5）と本因坊位初挑戦（51.4.14開始）敗退の際の28歳・31歳は，昨今の中国・韓国棋士の黄金期の頂点・終点に近いからその40代以降の全盛を浮彫にするが，準最高実力者（造語）級の彼の事例の通り「泣きが入る」は**驀進街道**で**躓く事**と変らない。

『現代囲碁大系・橋本宇太郎 上』の第24局の解説「昭和の大争碁」の冒頭の話として，橋本を主人公とした東京12チャンネルの「人に歴史あり」の録画（1972.12）の場で，岩本薫が20年前の橋本・坂田の7番勝負を振り返って，「あれは天保六年の本因坊丈和と赤星因徹の争碁とともに，わが国囲碁史上の二大争碁であった」と語った。敷延するなら呉清源対諸高手の一連の打込番碁を加えて**世界囲碁史上の3大争碁**に為ろうが，橋本が総帥を為す関西棋院（1950.9.2創立）の存亡が懸るだけに死闘の様相が殊に濃い。7番勝負史上初の第7局までもつ纏れ込んだ熱戦の中で本巻には決勝局だけが入っているが，第2譜（8～14）の解説「青鬼と赤鬼」は初戦以来の凄まじい角逐を振り返って，特に「青鬼」坂田 vs. 「赤鬼」橋本の図式の由来と為る第5局（5.30～6.1）に光を当てた。1-3で角番に追い込まれた橋本は今度の手合で恐らく本因坊を退かねばならぬ覚悟から，2日前に本因坊家が信仰する日蓮宗の総本山である身延山（山梨県南巨摩郡）に参詣し，本因坊を2回（第2・5期，1943・50年就位）も遣らせてもらった御礼を申し上げた。彼は前日に対戦地の昇仙峡（長野県甲府市）の温泉宿の大風呂場で見知らぬ老人と遭遇し，坂田側は勝負が終っていないのに不見識にも祝賀の用意をし

ているから負けるなど言われた。相手の傲慢を憤るその激励で敵愾心が天を衝いた橋本は死力を尽くして狂瀾を既倒に廻らし、「昇仙峡の逆転」は後世に残る伝説と為り昨今の中国碁界でも大逆転の形容に使われている。

初日の朝に本因坊昭宇は不敵の笑みを湛えて記者たちに「首を洗って来ました」と挨拶したが、自己顕示を潔しとしない為か開き直った心境を表す名台詞も自選打碁集に出ていない。逆に『坂田栄男 上』には「昇仙峡の戦い」（第8局解説の題）が今期唯一の対局として入り、「首を洗って来ました」/本因坊橋本昭宇。四十四歳。打ち盛り、淡々たる心境が対局前のさわやかな弁となる」と記した。次に「坂田栄男七段、三十一歳。こちらは血気盛んというか、ここで決めようというわけで、ゆとりがない」と続くが、気負いが空転する所為と後1勝の難しさも有り本局を境に明暗が反転して大逆転を喫し、本因坊戦に関しては1961年までの10年の雌伏を余儀無くされる痛恨の1局と為った、と述べている。坂田は「序」で特に強烈な印象が残っている3局の1番目として本局を挙げ、「昇仙峡の戦い」から3連敗した世紀の大逆転の衝撃は大きく、その後の10年間に亘り心に不振と為って深く刻み込まれたと告白する。従って、高川（格、1915～86、60年九段）本因坊（雅号秀格）の10連覇を阻止して、初めて本因坊に就いた時の喜びは筆舌に尽せないものが有った、と言うのが「悲願十年の局」（第16期本因坊戦挑戦手合7番勝負第5局、对本因坊秀格、61.6.16～17、251手完、黒番半目勝ち）の特に印象深い理由である。年代順で3番目に挙げた「頂点に立つ」の1局は、第2期名人決定挑戦手合7番勝負第7局（1963.9.29～30、対藤沢秀行名人・八段、178手完、白番中押し勝ち）で、本因坊に名人を加え碁界を制した誇りから「終生思い出の局」としている。木谷實は碁を思う存分に楽しみたい無邪気で対局中に洒落を飛ばす事が屢々有り、例えば秀哉名人（本名田村保寿、1874～1940、21世 [1914～38] 本因坊）引退碁（1938.6.26～12.4）で黒69を強く打ち下ろす時「雨か嵐か」と言った。中山典之の『昭和囲碁風雲録』第19章「呉清源、天下無敵」第2節「高川、本因坊九連覇」にも、藤沢秀行が感想戦で坂田に挑発する場面に居合せた時の「サアどうなるか。雨か嵐か」が出るが、小説家川端康成（1899～1972）は自ら認めた観戦記（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』7月23日～12月29日）を基にした実録文学『名人』（『呉清源清談・名人』[文藝春秋新社、1954]所収）の第20章で、苛辣な攻撃を仕掛けた時恰度嵐模様の夕立が来て雨風が硝子戸を叩き付ける光景を描き、「大竹七段」（作中の木谷の仮名）のこの得意な洒落は会心の叫びでもあったらしいと書いたので、盤上波乱（「波瀾万丈」を振った造語）の「嵐」は「荒し」に引掛けた諧謔の様に思える。相手の模様を深く侵し乱し地に成るのを防ぐ事に言うこの囲碁用語の語義中の「侵し」から、木谷門下の加藤正夫の「可笑しいねえ。お菓子を買ってしまいましたか」が連想される。名人戦観戦記者・囲碁著述家の内藤由起子（1966～）は『囲碁の人ってどんなヒト？ 観戦記者の碁界漫遊記』（毎日コミュニケーションズ、2005）第1章「舞台裏からみた対局風景」の「5. ほやきいろいろ」

に、師匠譲りの加藤・趙治勲の軽妙なばやきが色々と紹介されているが、**頭脳遊技の性質を帯び機智を含み得る洒落で囲碁や人生の原理を表すなら、世紀の逆転負けの後の雌伏は史上初の実力制名人・本因坊就位の至福への助走**であろうが、勝者でなく敗者がこの歴史的な1局を打碁集に収録した事は2人の**謙虚・初心**を思わせる。

本巻には1934～63年の間の25局が収録され敗局も4局(内1局は持碁負け)が有るが、上記の雌伏10年中13局も入るのに44～50年の7年間は1局も無く異様な空白と為る。五段時代の第6局(新鋭三羽烏争覇戦第5局、『棋道』1943年5月号掲載、先相先・対藤沢庫之助六段[後に朋斎、1919～92、49年九段]、白番中押し勝ち)も、七段時代の第7局(第1期最高段者トーナメント決勝3番勝負第1局、51.4.28、対細井千仞七段[1899～1974、57年八段、71年引退九段]、先番中押し勝ち)も、比較的短い手数(150手・175手)で相手を圧倒し優勝に繋がった会心譜であるが、43年の第3期本因坊戦で五段級・六段級を勝ち抜いた後は七段級で敗退し、翌年の2ヵ月の教育召集を経て45年に軍需工場勤務・自宅焼失・疎開の受難も強いられた。棋院本館焼失(1945.5.25～26)から中止し46年春に再開した大手合で七段に昇進した後、47年5月に日本棋院の再建の遅れや昇段制度改定への不満から囲碁新社を旗挙げし、前田陳爾七段(1907～75、63年九段)・梶原武雄五段(1923～2009、65年九段)・山部俊郎四段(1923～2000、63年九段)等7人と共に棋院を脱退した。『昭和囲碁風雲録』第13章「ゼロからの出発」第5節「一夜にして囲碁新社」に拠ると、一騎当千の猛者を集めた新社は人数が少な過ぎる故に焔も一時的な物と為り、日本棋院創設(1924.7.17)後に独立した棋正社(10.25結成)と同様に消滅的な方向を辿るかと思えた中で、看板棋士の坂田が読売新聞社企画の対呉清源3番碁を勝てば新社の存在を天下に誇示でき、精鋭揃いの自派の方が棋院より上だと宣伝できて前途が拓けて来ると期待されたが、重責を負う彼は**天下を狙う第一関門への突破を血気に任せて力尽くで図る**が、双方が持ち時間(各10時間)を費やし果てた1局目(先番)の血戦で運が無く1目負けし、白番の2局目は**第一人者の実績を死守する**呉に中押しに打ち取られ、先番の3局目はたった1日及ばず無念の3連敗と為った。「坂田七段は人生最初の、最大のチャンスを逃し、天下を獲るのにはこの時から十五年の歳月を必要としたのである」と中山典之は書いたが、「人生初の大一番」で惨めに頓挫した結果は**深刻な現実的打撃・精神的創傷**をもたらした。

高川秀格は『秀格烏鷲うろばなし』(日本棋院、1982)第5章「苦闘」第1節「わが生涯最良の年」の中で、1等実りが多い54年は生涯最良の年で39歳の自分は人生の絶頂を迎えていたと言う。1月の第1期NHK杯(争奪囲碁トーナメント)戦(ラジオNHK第2放送)準優勝(決勝で島村利博七段[後に俊弘・俊広・俊廣、1912～91、60年九段]に半目負け[白番、262手完])、5月の第1期日本棋院選手権戦優勝(決勝1番碁で篠原正美七段[1904～86、72年九段]に5目半勝ち[白番、204手完])、10月の八段昇進(10年ぶりの昇段)・第2期王座

戦決勝制覇（宮下秀洋八段 [1913～76, 60年九段] を2-1で下す）等の良績に就いて、坊門の村島諠紀（本名義勝, 1905～83, 当時七段, 66年引退八段, 追贈九段）・前田陳爾等は問題無く宮下が勝つだろうと祝賀会を準備していたが、後で聞いた時の気持は「ごまあみろというのと、悪いことしたなあというのと、半々である」と記した。宮下は1948年六段→49年七段→53年八段の「<sup>ごぼう</sup>牛蒡抜き昇段」で快進撃を続けていたが、祝いまで用意した関係者の過度の楽観は坂田栄男の「昇仙峡の逆転」の教訓を活かしていない。高川が更に特筆したのは同年の第9期本因坊戦で同棋戦初の3連覇を達成した事であり、初めて5歳年少の杉内雅男七段(1920～2017, 59年九段)の挑戦を受けた今期は「大苦戦」と形容した。4-2で制した6局(5.16～7.17)に焦点を当てる第2節「九連覇中, 最大の危機」に曰く、「千尋の谷を綱渡りするような場面が一再ならずある。危機を乗り越え、うまく向こう側へ渡りきったことを、天が与えてくれた幸運と呼ぶか、それこそがみずからの実力だと自負するか。」今期の運命の分岐点と為った第5局(7.5～6)では長考の末に無意味な黒95を打って<sup>しま</sup>了い、これで黒に活きが無くなり95は107に飛び付けて凌げば良かったと直後に気付いた時、がっくりと落胆し後何手で投げようか等と考えていたが、白100の失着で息を吹き返しその後も相手の誤りに助けられて地獄から這い上げられた。白100が102と打てば高川の巨石は恐らく眼が無く9連覇の偉業の芽が潰されたろう(図6参照)から、突如泣きが入った直後に幸運が転がって来るとは<sup>ひとこま</sup>囲碁史を織り成す悲喜劇の1齣である。

図6 第9期本因坊戦挑戦手合7番勝負第5局, 本因坊秀格(先番, 4日半<sup>こみ</sup>込出し) vs. 杉内雅男, 第95～137手, 157手完, 黒中押し勝ち

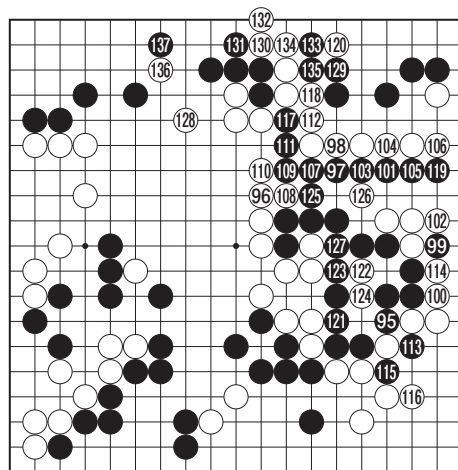


図6 出典 = 中山典之『昭和囲碁風雲録』第17章第3節参考譜(岩波現代文庫版, 2014年, 下巻45頁)。

### 棋士の「一撃大成」「初撃不発」「隠忍後発」型と「35歳の壁」

『現代囲碁大系』第24巻『杉内雅男』(本人解説, 小堀啓爾執筆, 1981)の第11局として、先番で中押し勝ち(173手投了)した第4局(6.22～23)が収録されている。「はじめての檜舞台」と題する解説の中の総括は、互角に戦いながら最後の2局で押し切られた展開に就いて、「結果的に見て高川さんに一日の長があったと認めざるをえないが、このときの残念さ、くやしきは今も忘れられない。棋士の生涯を俯瞰してみたとき、こうした機会というものはいくつ



与えられてはいない。その機会を的確につかむかどうかはすべてがかかっている。私は最初のチャンスをのがした」と述べている。碁界熟語の「泣きが入る」の「泣き」の痛切な悔恨の意味を示唆する証言として捉え得るが、中山典之も『昭和囲碁風雲録』第17章「高川秀格の時代」の第3節(同題)で、<sup>スコア</sup>得点とは裏腹に内容的に寧ろ杉内の方が押し気味だった挑戦の失敗を次の様に評している。「天保の昔、名棋士幻庵因碩は、本因坊丈和名人に一步先んじられて、遂に名人になれなかった。そして晩年の名著『囲碁妙伝』に、/“諸君子、碁は運の芸と知り給へ”/と無念の思いをこめている。/平成十五年現在、杉内雅男九段は八十二歳。いまなお現役棋士として活躍され、若い者に伍して立派な成績をあげている。しかしながら、この最初のビックチャンスを逃したのは痛く、結果的にはまだ三大タイトルに恵まれていない。/この、最初のチャンスをものにするには、碁人生では特に大事な事で、変な例えだが麻雀で言えばリーチ一発ツモに成功した棋士は、高川<sup>の</sup>先例はあるにしても、林海峰、石田芳夫、趙治勲、小林光一の例を見る如く、いずれも一時代を画している。山部俊郎、梶原武雄、そして杉内雅男の如く、実力者でも本因坊や名人になれなかった棋士に贈る言葉は唯一つ、“碁は運の芸なり”と喝破した幻庵の言葉だろうか。」

初回の大きな機会を<sup>しっか</sup>確り活かせた「一撃大成」(造語)組の5人の代表格の中で、高川秀格は第7~15期本因坊戦(1952~60)の「不滅の九連覇」(『秀格烏鶯うろばなし』第6章の題)を遂げ、81年に林海峰・石田芳夫に次ぐ4人目の実力制名人・本因坊と成った趙治勲は、同年の本因坊位奪冠と翌年の防衛を経て第44~53期(89~98)の10連覇を記録した。先達の偉業を超えた覇業の達成者はその順番通り林の後と小林の前に世界王者と成ったが、初の世界戦で2連覇した武宮正樹や棋戦「初物食い」の名手藤沢秀行もこの部類に入ろう。秀行の優勝歴は第1期青年棋士選手権戦(1948)に始まり、以後の23回の中で第1期の場合は6回も有った(57年の首相杯争奪高段者トーナメント、59年の日本棋院第一位決定戦、62年の旧名人戦、69年の早碁選手権戦、76年の天元戦、77年の棋聖戦)。彼の怪物は初優勝の頃に山部俊郎・梶原武雄と共に「戦後/<sup>アプレゲールさん ぼがらす</sup>戦後派三羽烏」と称されたが、天才肌の山部は1950年の新鋭トーナメント戦準優勝・59年の王座戦準優勝を始め、80年の天元位挑戦まで9回も決勝に進出しながら1度も戴冠に届かなかった。梶原に至っては1958年の首相杯準優勝から73年の全日本第一位決定戦準優勝まで、4回の2位/挑戦敗退は初の決勝進出が山部より8年遅回数も半分に満たない。杉内雅男は少し増しで非主要棋戦の優勝が2回(1959年日本棋院早碁名人戦、63年高松宮賞・東京新聞社争奪囲碁選手権)有るが、54年本因坊挑戦敗退~82年NHK杯準優勝で7回も2位に甘んじた。

「初撃不発」(造語)組の3者の生涯に亘る「欠冠」(造語、栄冠が欠如する意)に対して、坂田栄男は最初の入段選抜・呉清源との初番碁・本因坊位初挑戦で3度も泣かされたが、入段落選の翌年に難関を突破し、対呉3番碁惨敗の5年後の6番碁(1953.5.27~9.2)で先相先な

から4勝1敗1持碁を以て呉に勝ち越し、本因坊昭宇に撃退された10年後に奪冠し、又2年後の初代実力制名人・本因坊就位を経て、83年にNECカップトーナメント戦優勝で選手権獲得数合計64の新記録を立てた。中山典之が挙げた両極端の類型と異なる「**隠忍後発**」(造語)組の坂田に次ぐ大棋士として、同じく日本棋院理事長(5代後の第13代[2004])を務めた加藤正夫が居るが、彼は五段時代の1969年に22歳の若さで林海峰本因坊に挑戦して2-4で退かれ、以来8回も選手権戦決勝で倒れ続け「挑戦王」「万年2位」「常敗將軍」と揶揄された。1976年5月に第1期基聖戦で兄弟子の<sup>スコア</sup>大竹英雄を3-2で下して初選手権を獲得し、同じ接近の得点で林海峰から十段を奪取し(以後4連覇)、その後90年11月まで14年6ヵ月に亘って7大選手権を保持し日本碁界の最長記録を遺した。井山裕太(1989~ )が初獲得(名人位, 2009.10.15, これに由り九段昇進)以来の大<sup>ビック・タイトル</sup>冠保持を24年4月まで続けて行ければ、大記録も破られる為<sup>に</sup>在る宿命から逃れず1/3世紀ぶりに更新される事に為るが、7大選手権獲得の史上最年少新記録(趙治勲より1ヵ月年少の20歳4ヵ月)を作った彼は、満35歳に為る(2024.5.24)までの今後数年の間に最低1冠を堅持し続ける保証が無い。国際化時代では中国・韓国だけでなく日本の棋士も「35歳の壁」に阻まれる事も多いから、**高手雲集・棋戦密集の熾烈な競争・激しい消耗**を<sup>どこ</sup>何処まで乗り切れるか興味津々である。

「木谷三羽鳥」「<sup>トリオ</sup>黄金3人組」の加藤正夫・石田芳夫・武宮正樹はこの文脈でも<sup>おのおの</sup>各々異なるが、師の木谷實は3類型の中で**実力に見合う優勝が少ない悲運**の方に入るかも知れない。『現代囲碁大系』第8巻『木谷實 上』(小林光一解説, 相場一宏執筆, 講談社, 1981)の巻末論考「木谷實 棋道の殉道者」(相場)でも、<sup>シリーズ</sup>単独で本叢書の1巻以上を為した人の中の唯一の故人は「悲劇の棋士」(第8節の題)とされている。彼は1947・53・59年の本因坊位挑戦が全て不発で遂に主要選手権とは縁が無く、優勝は11期(57~67)のみの囲碁選手権戦の第1期, 6期(55~61)のみの最高位決定戦の第2・3期, 第7期NHK杯(59)の4回<sup>とど</sup>に止まる。1回目の脳溢血(1954.2.24)後の数ヵ月の入院・1年半の療養を経て**48~50歳時に爆発したのは凄いが**, 前出の「昇仙峡の戦い」の坂田解説中の本因坊昭宇の44歳の「打ち盛り」と同様に、**精魂を前倒しに使い果す傾向に在る今の中国・韓国の碁界ではこんな遅れ咲きは<sup>もはや</sup>最早無い**。『現代囲碁大系・坂田栄男 下』「序」の自己規定に拠ると、選手権戦史上初の本因坊名人と成った1963年の前後4~5年は坂田の黄金時代と言っても<sup>よ</sup>可い。第1局(第11期日本棋院選手権戦挑戦手合5番勝負第2局, 1964.1.6~7, 先番・対高川格選手権者, 225手投了, 黒中押し勝ち)の解説「絶頂, 昭和三十九年」が言うには、「坂田栄男四十四歳。アジアで初のオリンピックが東京で開催され、日本は高度成長時代を迎える。私にとっては、二度目の七冠王達成、いわゆる絶好調、すばらしい一年であった。」坂田は35歳の誕生日(1955.2.15)の前月に日本棋院の3人目の九段と成り、同年4月・9月に日本棋院選手権戦・最高位戦を制覇した後、59年に4冠(前出2冠+日本最強決定戦・NHK杯戦優勝)獲得で最強級の地位を固め、61年に同

4冠と本因坊位奪取、王座戦・日本棋院第一位戦優勝で7冠保持の記録を作った。1等実りの多い1954年を生涯最良の年とした高川秀格の言わば「絶頂、39歳」に対して、高川後の時代を切り開いた5歳年下の坂田の39歳はその後9年続く黄金期の起点に在るが、「昭和代表棋士の一員」(同書上巻「序」の言)を以て自任した彼の昭和39年の絶頂は、39年目に東京五輪開催を象徴として高度成長が加速した昭和の黄金時代の躍動と重なる。本因坊昭宇の打ち盛りと栄寿(坂田本因坊の雅号)の絶好調の44歳に当る昭和44年は、日本が西独逸<sup>ドイツ</sup>に取って代った世界第2位の経済大国として歩み出す最盛期の節目である。戦後の復興・平和・繁栄と連動した昭和の囲碁の発達<sup>トップ</sup>は江戸の黄金期と通じる背景を持つが、坂田の上記対局の四半世紀後の改元(1989.1.7)で終わった昭和の碁界の事情や感覚・常識は、更に四半世紀経った2010年代の半ばには大きく変ったり覆されたりする処が多い。高齢化社会の到来・定着に逆行する世界的な頂上級棋士低齢化の趨勢の定例化に由って、半世紀前に林海峰が打ち破った坂田の「40歳から最盛」の相場観は完全に否定されている。

44歳時に13歳若い坂田栄男との世紀の争碁で「昇仙峡の逆転」を演じた本因坊昭宇は、翌年の失冠後も王座3期(1953・55~56)・十段2期(62・71)を獲得し、73年から7期連続の名人戦総当り<sup>リーグ</sup>在籍と82年の本因坊戦総当り<sup>リーグ</sup>入りで最年長在籍記録(72歳・75歳)を遺した。老いて益々盛んな健闘の極みは数え齢で古稀と為る満69歳時の第1期棋聖戦決勝であり、50歳の藤沢秀行に1-4で撃退されたものの、後者の史上最高齢選手権防衛(1992年王座戦, 67歳)と好一对の記録を為す。昔の「古稀の壁」に対して目下は半分の35歳が棋戦優勝の「今稀」(造語)に為る感が有り、応氏杯創設の発表の前日に35歳と為った聶衛平は9ヵ月後の1988年3月26日に、12日前に中日囲棋擂台賽の主将对戦を制し中国に3回連続勝利をもたらした功勞に由って、遥かに相応しい呉清源でさえ聶の生年に台湾政府に対して辞退した「棋聖」号を得たが、翌日に始まった两国選手団勝抜戦では6人抜きした依田紀基七段(先鋒)を止めたものの、12月18日の敗北で初めて主将の責任を全うし得ず中国の2-7の惨敗を阻めなかった。36歳・37歳時の富士通杯(2回)・応氏杯でも3位・16強・準優勝に止まったし、中日囲棋擂台賽では出番の有る第6回(1991.3.22~92.3.20)・第7回(92.4.1~93.5.10)・第8回(93.5.31~12.8)の3連敗を喫した(負けた相手は主将の加藤正夫・副将の淡路修三[1949~ , 84年九段]・4番手の依田紀基八段)。主将出場前に中国が勝利した第5・9・10回を除く7回の出陣の最終結果は3勝4敗であり、団体戦の最終回と為る第11回(96.5.30~12.27)では44歳の「高齢」も一因か外されたが、第4回日中スーパー囲碁の3番手として聶を倒した羽根泰正(1944~ , 71年九段)は、正に44歳時に初戦以来11連勝中の「鉄門」(鉄の守護神<sup>ゴールキーパー</sup>)を破る「一撃大成」を遂げた。彼は国際戦の最良績に続いて46歳時の1990年に国内戦最良績の王座就位を果たしたが、3歳年下の加藤正夫から獲った栄冠を翌年に19歳年上の藤沢秀行から奪われたのは、20世紀の日本碁界で多い世代間の「上剋下」(造語, 年上が年下に勝つ意)の好

例に為る。

## 中国の「27歳頃に最良績」法則に見る競争の激化・最盛期の短縮化

第2回富士通杯で前回3位の聶衛平は1回戦種子と為り2回戦で格下の王銘琬に敗れたが、中華台北代表に対する政治的にも不本意な負けは王の27歳の若さを思えば順当とも言える。王の義兄周俊勳（1980～，98年一品〔九段〕）が台湾初の世界王者と成ったのも27歳時で、LG杯決勝で2歳年下の胡耀宇（2005年八段）を下したのは中国で多い「27歳頃に最良績」に符合する。彼は1992年に成都（四川省省都）の「西南王」宋雪林（1962～，98年九段）宅に通い、3ヵ月の間に毎日1局の指導碁と講評を受けその開眼で非專業6段の棋力を急伸ばさせた。大陸で修業を積んだ後1993年に中国囲碁協会の初段と成り翌年に台湾で專業入りしたが、大陸でも活躍し続け台湾4選手権全制覇の97年に全国個人戦6位入賞の良績を上げた。2003年に貴州衛視（衛星放送）隊の選手として中国囲碁甲級聯賽に出場した時、実力・知名度が上と成ったにも関わらず恩師に対して丁寧な表敬をした（師弟対戦では負けた）。<sup>3)</sup> LG杯優勝後の第一声も宋・俞斌・呉玉林（1946～，88年六段）と中国棋院への感謝であり<sup>4)</sup>、早期から台湾覇者時代までの大陸棋界の指導や舞台提供の影響・受益の大きさが窺える。彼は事績が小学の教科書に載るほど台湾の英雄と為り同年の結婚で幸福の絶頂を味わったが、世界戦では2001年富士通杯の4位に届く事も無く域内棋戦の優勝も33歳で途絶えた。2015年の棋王戦優勝後の無冠は聶と同じ「35歳の壁」にぶつかった結果の様に映り、日本でなく中国を修業先と第2の主戦場に選んだ彼の盛衰は大陸化の色彩を帯びている。韓国棋院二段時代に来日（1963）後66～73年に日本棋院初段～五段の経歴を持つ曹薫鉉と似て、本拠地以外の修業地の囲碁文化に染まり複合的な特質を兼ね備えている様に見受けられる。

9歳・棋歴5年の1962年に韓国棋院で入段した曹薫鉉は日本棋院の院生4級から始め、入段後70年に33勝5敗1持碁の良績で棋道賞新人賞を受賞した。五段昇進の翌72年に兵役の為に帰国し76年の除隊まで空軍に在籍し、73年から韓国棋院五段として兵役の傍らで棋戦に参加し同年に初選手権の最高位を獲った。社会復帰の23歳時から2度目の新星誕生の勢いで国手戦10連覇を始め数々の優勝を遂げ、1978年に韓国の現代囲碁の開拓者趙南哲（1923～2006）に次ぐ2人目の八段に進み、80年の8公式戦全制覇を経て82年に九段第1号と成り翌年昇進の趙を名実俱に超えた。1980年の結婚も含めて27歳は公私とも人生最初の絶頂期と言えようが、1歳年上の聶衛平も27歳時の最良績続出・榮譽獲得及び初婚に由って幸福に満ちた。『我的囲碁之路』（薛至誠整理〔構成〕、〔成都〕蜀蓉棋芸出版社、1987。日本語版＝田畑光永訳『私の囲碁の道』、岩波書店、88）で、79年の全国個人戦4連覇、第1回新体育杯・第1回世界非職業圍碁選手権戦優勝、対日本九段陣16勝7敗2持碁、体育榮譽勳章（国家体育委員

会〔<sup>スポーツ</sup>体育省〕授与〕受章、「全国十佳運動員」(全国<sup>スポーツ</sup>体育選手 10 傑) <sup>ベスト・テン</sup>入選で、自分の囲碁人生は頂点に達し当時は正に得意の絶頂に在ったと回顧している。孔祥明(1955～, 85年八段)と結婚したのは80年の春だと書いたが、3月の婚礼も前年秋の「結婚登記」(入籍)も27歳の出来事である。少なくとも5年間は自分を脅かす者は居ないと公言し碁界の頂点で笑み崩れていた彼は、一連の栄光と自負を列挙した第12章「楽山での惨敗」の記述の通り一陣の疾風に襲われた。1980年全国個人戦で劉小光(1960～, 88年九段)の優勝を許し上位6位にも入れなかったが、28歳の誕生日を過ぎた後の初秋の谷底への転落は27歳の登頂の輝きを一層際立たせる。聶は「文革」中に若者の「思想教育」の為に北京から最北の黒龍江省の農場に行かされ、伸び盛りの歳月を空費したものの曹の兵役よりも艱難の試練で意志の鍛練が出来た。1981年の同棋戦・国手戦優勝や新体育杯5連覇(～83)・80年代中期の対日戦の良績には、不遇・苦勞に耐えて得た往年の「盤外の収穫」(第9章の題)は強い推進力を為していた。応氏杯決勝で曹に負けたのは心の緩み・体の不調と共に中国の棋士の「老化」傾向も背景に有り、彼が第14章「棋士と自信」で指摘した通り中国では30代で駄目になってしま<sup>しま</sup>う棋士が多く、家庭の雑用等に精力を削がれる等の他に棋士仲間から「○老」と呼ばれる慣習も一因である。

橋本宇太郎は70歳の高齢にして宝刀老いず棋聖戦決勝に進出して若手棋士を恐れ入らせ、「20歳の棋士と対局する時には自分を19歳と思うことにしている」という氏の名言は素晴らしく、我々の「老」棋士には何故こんな意気込みを持たないのか、と30過ぎにもう「聶老」と呼ばれる「光榮」に浴びた中国王者は34歳時の自伝で嘆く。75歳で本因坊戦<sup>リーグ</sup>総当り入りした橋本の史上最年長在籍記録は若手棋士の協力も不可欠で、同棋戦進行中の『毎日新聞』1982年3月20日夕刊の記事「第37期本因坊リーグ大詰め/小林5連勝で断トツトップ/2敗で橋本(昌)、武宮が続く」に、「武宮は、三度本因坊になる新しい記録への挑戦に燃え、第一戦で橋本(昌)に勝ち、続いて林海峯を倒したが、関西棋院の橋本宇太郎九段に敗れたあとやや不調気味で、加藤には勝ったが、坂田栄男九段には負けと、敬老精神か、どうも大先輩にはヨワイようだ」と有る。62歳の坂田の他56歳の中部総本部の<sup>ベテラン</sup>老将岩田達明も8人の挑戦権争奪に加わったので、林より7歳年上の橋本昌二(1935～2009, 58年関西棋院九段)の47歳が平均年齢に為る。最終戦を待たず木谷實一門3人中の最年少者(29)が更に4歳若い趙治勲に挑む事に決ったが、7戦全勝した小林光一の開始時の順位は並列5位の4人の中で年齢順通り最下位に居り、下から2番目の橋本昌二も5勝2敗で元1位・最終3位(4勝3敗)の武宮正樹の前に躍進し、当初2・3位の林・加藤正夫と同じ2勝5敗で5位中1・2番の橋本宇太郎・岩田も陥落した。序列・年齢両面の下剋上の加速化を印象付けた結果は古豪群の退場の前兆とも思われ、4勝3敗で初戦時の4位(残留組の最下位)を保った坂田は翌年に最後の棋戦優勝をした後、1984年に日本棋院理事長職に専念する為1年間休場し、藤沢秀行も83年初頭に棋聖位を趙に奪われ直後に胃癌の切除手術を受け老衰が進んだ。1982年は中国の段位制度発足や曹

薫鉉の九段昇進等で3強国鼎立の時代へ向う節目だけに、史上最年長在籍記録が出た今回の明治・大正・昭和3世代の交錯・交代は特筆に値する。

『毎日新聞』4月9日の続報「本因坊戦 挑戦者に小林九段」の次の版の将棋選手権戦記事は、「王将位防衛/ただ脱帽 大山59歳の気力/カド番から大逆転/柔軟戦法で中原のみ込む」と題した。この第31期で将棋史上の最年長防衛記録を樹てた大山康晴（1923～92、54年時点での名人3期達成に由り58年九段）は、加藤正夫と同じ34歳の中原誠名人（1947～、選手権3期以上等に由り73年九段）を1-3から3連勝して撃退し、16年前の対挑戦者山田道美（1933～70、68年八段、追贈九段）の同じ進行と一緒に、30代前半の後輩強豪を「二枚腰」の粘りで優勢から追い落す「大正力」が真に物凄かった。奇しくも史上最強の大山の專業入り（四段）の1940年1月1日に生れた加藤一二三は、最高齡現役・最高齡勝利（77歳）・現役勤続年数（62年10ヵ月）・通算対局数（2505局）等の記録を作り、1950・60・70・80・90と2000の各年代で順位戦最高峰のA級に在籍歴が有る唯一の棋士である。日本では弱者・敗者を同情・応援する判官鼻息の心情が強いばかりでなく、強者・勝者を崇拜・礼賛する実力尊重の傾向も同様に強い。「ただ脱帽」の激賞を前面に出す上記報道も大山の棋力・体力・精神力への賛嘆に一辺倒で、言及が有る旺盛な食欲は2年前に彼から奪冠された加藤一二三の精力絶倫の現れとも為る。

陽気な大山王将は休憩時間に関係者に「碁でも打ちなさい」「マージャンをしたら」と声を掛け、「対局者の立場にいながら“チャンネル”の切り替えが実に早い」と書かれている。この1駒に窺える盤上遊戯の親縁性を体現する様に大山は日本棋院の非專業五段の免状を持ち、井口昭夫著『名人の譜——大山康晴』（日本将棋連盟、1992）第3章「戦中戦後」に拠ると、大戦末期の兵役中に碁好きの師団長の相手を務めた事が契機で前線行きを免れた事も有る。余技の碁が特殊技能として認められた優遇は「一芸は身を助ける」の好例に数え得るが、多くの囲碁棋士も経験した戦乱の苦難は大山と同じ大正世代の強靱さの根底に見られる。1983年度NHK杯で最後の優勝（同棋戦で8回目）を遂げた大山は晩年に癌と闘いながら、86年の名人戦挑戦に続いて90年の棋王戦で選手権挑戦の最年長記録（最終局の最終日は67歳の誕生日[3.9]の3日前）を作った。2歳年下の藤沢秀行も3度の癌を克服して1991年に67歳で史上最高齡の選手権防衛を果たしたが、曹薫鉉の精神・技量の大成は心の師なる瀬越憲作と芸の師なる秀行の薫陶に負う処が多い。『世界最強の棋士、曹薫鉉の考え方』（戸田郁子訳、マルク、2016[原著=15]）の「八段」（第8章）「人から学ぶ」第1節「どんな遺産を残すか」に、曹の兵役の為の帰国で落胆した瀬越の自殺と曹を日本に連れ戻されたいという遺言が記してある。自分の手で自分の首を絞める師の自殺は普通なら事切れる前に力を緩めて了うののだが、どんな事でも決心したら迷わず行り遂げる師の強固な意志に曹は驚嘆を禁じ得なかった。50歳・52歳（2003・05）に世界戦・国内戦の最後の優勝をした彼の足跡は2人の兄弟子とも重なるが、

才気・闘志溢れる「火の玉」橋本宇太郎は87歳の逝去まで現役を続けており、呉清源は古稀時(1984)の引退後100歳の天寿を全うするまで碁の研究を中断しなかった。

## 燃え尽きや衰退の早期化の加速と日本碁界の韓国・中国化

31歳の武宮正樹が44歳上の橋本宇太郎と31歳上の坂田栄男に負けたのを「敬老精神か」と言うのは、早くも1966年9月15日を国民の祝日「敬老の日」に制定した国柄らしい諧謔である。中国では23年後に旧暦9月9日を非祝日の「老人節」(別称「敬老節/日」と定められたが、日本の後追いであり扱いても軽いとは言え儒教の伝統に従う中国人の敬老精神も昔から強い。日本では2008年に改定された老人保健制度の規定に由り高齢者は65歳以上と為るが、国民年金導入時(1961)の男・女の平均寿命は65・70歳台だったので長寿化の速度が早い。中国人の平均寿命は改革・開放(1979年発足)以来の生活改善の結果として大幅に伸び、2015年には男性74.6歳・女性77.6歳(日本は80.5歳・女性86.8歳)に上がったが、老人の区分基準は今も平均寿命の差に相応しく日本より低い60歳超とする儘である。昔の短命常態化時代の国情や敬称の心算で人の「輩分」(世代)を嵩んで呼ぶ儀礼感覚から、50代の人でも周りから目上扱いの意味を込めて「老～」の呼称で呼ばれる事が今だに多い。橋本宇太郎と同年齢の伊藤友恵は1961年に使節団員として訪中した際53歳だったのに、中国では当時の関係者も今の出版物の記述も彼女を「老太太」(老婦人。お婆さん)と称している。陳祖徳回顧録『超越自我』の日本語版(邱茂訳『陳祖徳自伝——日中碁界、激動の三十年』,新潮社,1992)では、伊藤五段(「老太太」にも作る)の全勝を許した国辱に対する激憤の件は日本側への配慮から消されたが、往年の中国碁界の奮起の原動力を示す原題の「国恥(国辱)を「惨敗」に変えた第8章に、「この五十の坂を越したおばあさんは見るからに日本式の生活習慣にこりかたまっていて、椅子式がなれない様子だ」という直訳の呼称が出ている。中国で年配の女性や他者の母親等に用いる尊称は日本的な感覚では甚だ失礼であろうが、中山典之は『昭和囲碁風雲録』第3章「院社対抗戦」第4節「棋正社惨敗の因」の中で、秀哉を「老齡(と言っても数えの五十三歳)の名人」と表しているから碁界では許容されよう。「大橋本(宇太郎)」「小橋本(昌二)」に次ぐ関西棋院の第一人者結城聡(1972～, 97年九段)も、37歳時の三星杯参戦に関する中国の論説で「老将」と記された<sup>5)</sup>から吟味の必要が有る。

結城聡は新人王戦優勝(1993)・早碁選手権戦優勝(95)の頃から碁界内外の注目を浴び、『文藝春秋』94年4月特別号(創刊1000号記念)の企画「2001年 日本の顔」で棋士の代表に選ばれたほどである。碁聖戦挑戦4回(1997・2002・05・09)・棋聖戦挑戦1回(05)を経て天元・十段各1期獲得し(10・13), NHK杯優勝5回(09～10, 12～14)等も含めて優勝歴を42歳まで持った。69歳時の橋本宇太郎以来29年ぶりに関西棋院から棋聖戦決勝に出た時は32歳

であり、4歳年下の羽根直樹（2002年九段）に撃退されたのは**下剋上の時流**を反映している。羽根は同じ齢の高尾紳路（本因坊位獲得に由り2005年九段）・2歳年下の山下敬吾（棋聖位獲得に由り03年七段→九段飛び級昇進）・4歳年下の張栩と共に「平成四天王」と称され、棋聖2連覇（06～07）・本因坊2連覇（08～09）・天元3連覇（01～03）・碁聖1期（11）、阿含・桐山杯2期（04・09）・NHK杯1期（06）等と良績が多数有り、春蘭杯準優勝（03）も世界戦に於ける日本棋士の今世紀の数少ない準最良績（造語）である（他に05年第2回中環杯世界囲碁選手権戦4強入り・06年第3回トヨタ&デンソー杯囲碁世界王座戦8強入り）が有り。父親・師匠の羽根泰正の王冠戦（日本棋院中部総本部所属棋士のみ参加する地域限定棋戦）優勝4回（28～48歳間の1972・78・83・92年）、一般公式戦1冠（46歳時の王座戦）に対して、95年（五段・19歳時）の第26回新鋭トーナメント戦（七段以下・30歳未満の年間対局料・賞金額上位者が出場する序列・年齢限定棋戦）優勝、99年の第40期王冠戦優勝を経て、25～35歳の間に平均年1回の速度で上記の一般棋戦優勝11回と世界戦準優勝1回を遂げた。父親と同じく戴冠した全棋士参加の公式戦は全て7大棋戦の内在り、中国流で言う「**含金量**」（価値／賞金含有量）が高い栄冠ばかり獲るとは「天王」の名に相応しい。

羽根直樹の7大棋戦挑戦敗退の2回は35・36歳時の王座戦・名人戦（2011・12）であり、36歳以降の優勝は王冠戦（02～04・07～09の3連覇2回に続く11～15年5連覇）に止まった。彼は棋聖奪冠の2年前に棋聖3連覇中の王立誠と共に中国囲棋<sup>アリリーグ</sup>の選手に招聘され、以来2017年の一力遼（1997～、棋聖戦総当り入りに由り2014年三段→七段飛び級昇進、棋聖戦挑戦権獲得に由り17年八段）まで、韓国の一流棋士が毎年多く招かれるのと対照的に日本勢の出番は13年連続で無かった。それほど高く評価された彼は全盛期の年齢層が同時代の中・韓の高手陣と可く似ており、「四天王」中の内外棋戦の最良績を誇る張栩も満34歳と為った直後に棋聖防衛に失敗し、無冠・不調から脱出すべく翌年に生活の本拠を故郷の台湾に移し1年間に亘って雌伏した。彼は**参戦者が全て世界王者経験者**の第10回春蘭杯準々決勝（2014.12.25）に臨む際、命を縮めても頑張るという従来の決意の代りに今回は恐らく最後の8強入りに為らうと語った。<sup>6)</sup> 今期優勝の「老将」古力に4強入りを阻まれた後その悲愴な予言は未だ破られていないが、**世界戦の最良績が高いほど7大棋戦優勝の中断が早い**という張・羽根に見られる**逆相関**は、<sup>トップ</sup>陣が林立する<sup>あいり</sup>隘路を突破し世界最高峰に登り詰めて行く死闘の苛酷さを示唆する。曹薫鉉の次世代の**純国産覇者**の李昌鎬は35歳時の2011年初頭に22年ぶりの無冠に陥り、世界戦優勝回数が1位の李昌鎬（18回）に次ぐ14回の李世<sup>イセドル</sup>（1982～、富士通杯2連覇に由り03年七段→九段）は、**燃え尽きや衰退の起点の早期化**を体現して33歳以降急速に優勝から遠退く様<sup>とおの</sup>に為った。中国最多の古力は2006年のLG杯優勝（これに由り七段→九段）を始めに、世界で3番目に多い曹の9回に次ぐ8回を経験したが、同年齢の李世<sup>イセドル</sup>と同じ15年に最後の世界戦制覇を遂げ、世界戦よりも大変だと時越が感慨した国内公式戦<sup>7)</sup>では30歳代の



優勝は1回も無い。

「四天王」中の山下敬吾は新人戦4連覇(1998~2001)中の00年(21歳)の碁聖位奪取から、棋聖5期(03・06~09)・名人2期(11~12)・本因坊2期(10~11)・王座2期(06~07)・天元2期(04・09)を獲得し、7人目の実力制名人・本因坊として棋史に名が留まっている。国内に於ける目覚ましい活躍に反して世界戦の最良績は2005年第1回中環杯4強入り、及び01年LG杯・05年第2回中環杯・08年三星杯・同LG杯・09年富士通杯8強入りであり、平成に専業入りした棋士乃至世界戦時代の日本碁界全体の韓国・中国化を現すかの様に、35歳の誕生日(13.9.6)の3週間後の竜星戦制覇から優勝歴の空白が4年も続いて来た。第22期竜星戦での3期ぶり・2度目の優勝は決勝の3劫無勝負に由る再戦の結果であり、波乱の末に負け翌年に優勝した河野臨も激烈な棋風・強靱な闘魂に韓・中の主流に近い。彼は棋戦初優勝(第1回JAL新鋭戦, 2004)の2年前に中国囲棋甲級聯賽に出場し、李昌鎬・馬曉春・俞斌に次ぐ4位の主力として浙江新湖隊の全国3位獲得に貢献した。名伯楽の馬に買われた腕前はその時2勝3敗で発揮し切れず<sup>8)</sup>後に再び招聘されなかったが、韓国の強豪と共に初期に参入した「(域)外援(軍)」の日本の棋士としての才覚・意志は、2005年の天元戦初挑戦から爆発し同じ力戦派の山下を3年連続で破って3連覇を導いた。中国棋士の最良績が出易い27歳時には張栩から天元位を取られたが、NECカップ・竜星戦で優勝し賞金順位が「平成四天王」に次ぐ5位に上がった。その後2010年のNECカップ再優勝を経て、14年に竜星戦再優勝・賞金順位2位、16年に阿含・桐山杯優勝等と順調に伸びた半面、天元戦挑戦(12)・碁聖戦挑戦(13~14)・名人戦挑戦(14)・棋聖戦挑戦(17)は全て敗退し、NHK杯・テレビ亜細亜選手権・第1回日中竜星戦準優勝(14)に続いて、第18期阿含・桐山杯日中決戦(16)でも後1歩及ばなかった。第41期棋聖戦挑戦者決定戦変則3番勝負(Sリーグ[最上位群]優勝者1勝有利)でAリーグ1位の張栩を2-1で下した(2016.11.10・14)後、36歳の誕生日(17.1.7)の直後に始まった7番勝負(1.14~3.10)で27歳の井山裕太に2-4で撃退された。激闘で精魂が尽きた所為か次期総当りS群の6人中開始時の1位から4位に落ち、5位(前回から昇格)→3位の張栩と共に挑戦者決定勝抜戦への進出が成らなかった。他の6大棋戦でも総当り又は本戦で上位4名に入れなかったのが36歳の壁が感じられ、李昌鎬・古力等の様に最盛期と反転する無冠の常態化が待っているか否かが懸念される。

河野臨の世界戦の最良績と為る8強入りは5回有り(2001年富士通杯, 07~08年LG杯, 09年富士通杯, 16年応氏杯)、国際競争に掛ける意欲と戦果は内外で注目を浴び取り分け中国での評判が頗る良い。専門誌『囲棋天地』(中国囲棋協会・中国体育報業総社[新聞業本社]合同、月2回刊)では度々取り上げられ、その都度彼の「地味に凄い」とも形容できる実力・魅力が宣揚・再認識されて来た。2016年第10期(号)の記事「応氏杯再出発」(楊燦)の第2節「半程黒馬」(道半ばの穴馬)では、脇役の形象が付き纏いながら第8回応氏杯で8強入

りした彼に焦点を当てている。囲碁著述家の筆者は往年の囲碁王国に対する直近の囲碁王国の親近感・優越感を代弁して、中国的な表現の特徴と為る「身も蓋も無い」率直さを以て日本の不振と河野の善戦を論じる。曰く、本戦出場枠が24から30に増えた今大会で日本から近年に珍しい6人も参加したが、第一人者の井山裕太が棋戦日程との衝突で出られない故に、日本棋院は又「毫無生氣」地選派了一支「高齢隊伍」(「些かも生気の無い」儘「高齢選手団」を選抜・派遣した)。「結城聡・羽根直樹・山下敬吾・張栩は、何れも35歳を超え出世(原文=“成名”)から20年近く経った棋士だ。初めて応氏杯に顔を出した蘇耀国と河野臨も、他の選手団の最年長者よりも年上だ。」蘇(1979～, 2004年九段)はともかく2歳若い河野まで「高齢」の部類に入れるのは、中国碁界の「35歳超=老」の固定観念に基づく区分と共に礼賛を際立たせる意図も有ろう。日本は世界戦で衰微して久しく今回も波乱を起す事無く早々と消えるだろうと見る向きが多い中で、仮令個別の日本選手に期待が持たれても河野が穴馬に為ると予想する人は居ないが、「資格賽」(1回戦)で世界王者陣の陳耀燁(1989～, 世界戦準優勝2回に由り2006年三段→九段)、「預賽」(2回戦)で朴永訓(1985～, 富士通杯優勝に由り04年五段→九段)を連破し、2局とも日本囲碁の尊厳を守った勝利である、と言う。

### 韓国・中国の碁の競技化・執念と日本の碁の芸道化・礼法

国内戦で身動きが取れず世界戦への出場を割愛する事が多い井山裕太は2016年4月20日、伊田篤史(1994～, 本因坊戦挑戦権獲得に由り14年八段)から3-1で十段位を奪取し史上初の7冠独占を遂げた。棋史を飾る金字塔が樹立されたこの日に応氏杯1回戦(上海)で日本勢が2勝4敗と為り、羽根直樹が呂皓鈞(1989～, 2016年米国囲碁協会初段)を下し河野臨と共に2回戦進出を決めた。張栩対柯潔(1997～, 百霊愛透杯優勝に由り15年四段→九段)、山下敬吾対時越の2局は、世界1位と6位前後(諸説有り)に勝てない「死籤」(死[必敗]の籤)の下馬評に反して互角以上に戦えた。中国出身、12歳時に来日後24歳で新人王獲得、28歳で本因坊戦挑戦者決戦に出た蘇耀国も、黄雲嵩四段(1997～, 17年六段、15年グロービス杯世界囲碁U-20等優勝3回)に対して、大半の時間に於いて優勢で進めたが中押し勝ちを許してしまった。結城聡は籤運が最悪で1回戦で唐韋星(1993～, 三星杯優勝に由り2013年三段→九段)に当たったが、今期優勝者の唐は2回戦で羽根に3目勝ちしたものの相手の追い込みに動揺し汗が出た。楊爍は最後まで勝ち切れないのが世界戦に於ける日本の棋士の通弊だと断じる一方、長年弱い立場に置かれて来た日本勢が「以老撃少」(年長者を以て年少者を撃つ)の状況で、中国の若い「頂尖」(頂上)棋士を相手にこれほど実力が発揮できた結果は、高手の間の差が想像するほど大きくない事を物語っていると結論を付けた。

武宮正樹は『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』(河出書房新社, 2013)の第60(258)

2章「日本の碁」を考える」の中で、「国際舞台で勝てなくなった日本」(第1節の題)の現状を踏まえて、韓国・中国の強さの秘密を「徹底した競争システム」(第2節の題)に求める。曰く、国際棋戦で勝てなくなった近年の日本の棋士が負ける型は略一定してしまっている感があり、序盤で巧く立ち上がり、前半は優勢に打ち進めていたのに、中盤の戦いで難しい碁にされ、最後には追い抜かれる、という逆転負けを幾度も見せ付けられて来た。2016年応氏杯で中国勢に屈した上記の数人の負け方は定石通りの展開と言えようが、日本の初代世界王者は執筆時の世界最強の韓国陣の勝利への凄まじい執念を彼我の差に挙げ、韓国では結果至上主義の中の競争から李世石や朴永訓等の世界級の若手が現れ、つい数年前まで頂点を争っていた上の世代を呑み込んで了う時代に為っていると言う。「近年の中国囲碁界を見ていると、今や韓国以上に選手の淘汰が厳しいようです。名前を聞いたこともない十代の選手が次々と国際大会に出てくるのですが、これが驚くほど強く、涼しい顔をして勝ちまくる——かつて坂田栄男先生や藤沢秀行先生(ともに故人)など、六十歳を過ぎても活躍している先輩方を見て“これぞ棋士の鑑だ”と思って育った私などからすれば、中国や韓国のこうした若手の強さは、すべての価値観をひっくり返された思いがしています。」武宮より31歳若い李世石・古力は武宮の31年前に生れた坂田とは在り方が反転を為し、その31歳に当る本書刊行の2013年には武宮の予想以上の中国の世界王者量産が起きた。

「応氏杯再出発」の記述中の「高齢隊伍」は揶揄の様に響くが敬老精神も含まれており、「以老擊少」も「以卵擊石」(卵を以て石に投ず)と違って若手に挑む勇気を称える意が有る。再登場の4人と初出場の2人を年齢順に並べた事は東洋の礼義の邦の長幼の序に符合し、『現代囲碁大系』の「監修 橋本宇太郎/呉清源/高川格/藤沢朋斎/坂田栄男/藤沢秀行/林海峯/大竹英雄」も然りである。秀行は朋斎の叔父(父親は朋斎の祖父)に当り中国流で言う「輩分」(世代)が上と為るが、甥より6歳若い故に5歳年上の坂田の前年に生れた朋斎の方が先に出るわけである。中国語の「先生」は日本語に無い意味として成人男性に対する儀礼的な呼称にも用いるが、英語のmisterに有る粗略な語感は無く原義の「先に生れた人」への敬意を表す発想である。秀行より17歳年下の林・大竹は同年同月の生れで呉の命名に由る「竹林」と並称される(呉を名付け親とする説は『五人の棋士』第4篇「勝負師の沈黙——林海峰」[初出=『小説サンデー毎日』1973年6月号]に見える)が、熟称(「熟語・通称」を合成した造語)と逆の配置は出生順(1942.5.8・14)と思われる。林は7番勝負の初挑戦・奪冠で10年の長(「一日の長」に擬えた表現)が有るから尚更順当であるが、日本では和製漢語「年功序列」の字面の通り功績より年齢の優先順位が高い事も多い。平成がすでに10年経過した1999年8月20日、日本興業銀行・第一勧業銀行・富士銀行の頭取が共同記者会見で3行の経営統合を発表した。総資産140兆円超で世界初の1兆ドル(当日=111兆円強)級規模と成る新しい金融グループは、西村正雄(興銀)・山本恵朗(富士銀)が最高経営責任者会長、杉田力之(勧銀)が同社長と為っ

たが、帝国ホテルで行う会見の前に3行事務局折衝に於いて真ん中の席を巡る争いが有った。勧銀は総資産最多（52兆5300億円、富士銀と興銀は46兆3800億円と42兆900億円）、人員数（約1万6千）も富士銀・興銀（約1万4千・4千8百）を凌ぐので3者中の最強であるが、合併に由る発足（1971年）は興銀・富士銀の創設（1880年、1902年）に比べて遥かに遅い。結局は長幼の序に従おうという興銀側の理屈が通って最年長の西村（66歳）が真ん中に、山本（63歳）と杉田（56歳）はその左横・右横の次席・末席に立つ形で決着が付き、会見後の3者握手も向って左から杉田・西村・山本の順で規模最小の方が真ん中に居た。中国由来の「両雄並び立たず」原理で2強が俱に譲る均衡の所産とも見受けられるが、資産や頭数より長幼の序で行くという主張が事務方の折衝で承認された事は日本的である。<sup>9)</sup> 日本の囲碁は「国技」の相撲と同じ「礼に始まり礼に終る」芸道的な要素が強いが、棋戦に於いては長幼の序を重んじる礼法感覚よりも実力の差で量る価値判断が先行する。

「日本棋院 囲碁規約附属 囲碁作法に関する特別規定」（1949〔昭和24年〕10月2日制定）の「前文」に曰く、「囲碁は、その歴史が古く、伝統に富み、且つ、室内に正座して、知能を争う技として、特に品位を重んじ、礼儀を尊び、対局上の作法を最も尊重してきたものである。」日本棋院大手合その他公式又はこれに準ずる対局、専門棋士間の対局等に於ける対局者・関係者の守るべき作法は、他の対局に就いても当規定に依る事を切に勧奨すると記したので昭和の碁の常識と言える。次の第1条「着席」の第2項は、「対局室の構造及び碁盤の配置上、着席の個所に上座、下座が明らかな場合においては、別段の定める場合を除いて、段級位の上位者（又は技倆優位なる者）が上座に着席し、互先の対局者においては、白番の者が上座に着席する。但し、公式競技でない対局においては、社会通念により上座着席を定めることを妨げない」と為り、**実力本位の基準しか無く長幼の序は精々非公式対局で許容される社会通念に入ろう。**第2条「碁盤及び碁器の取扱」の「3 手合割互先の場合においては、まず規約第14条第2項によって、“握り”により先着者を決定した上で、白番対局者が上座に、又黒番対局者が下座に着席し、第1項の作法を行なう」（「規約」第14条「互先」の第2項＝「互先の対局においては、対局開始前“握り”によって先着者を決定する。“握り”とは、対局者の一方が任意の数の石を握り、他方が“奇数先”又は“偶数先”の選択を述べ、その石数の奇数又は偶数を計算して先着者を決定する方法をいう」）、「4 手合割が互先でない者が、競技方法の定によって、互先による対局をする場合においては、段級の上位者が石を握り、下位者が選択を述べて先着者を決定した上、第1項の作法を行なう。但し、上位者は、第1条第2項により黒番となっても、上座に着席するものとする」でも、**上座・下座の峻別と着席・握りに於ける段級の上位者優先が強調され長幼の序は出て来ない。**

25歳時に将棋界初の7冠独占を遂げた史上最強級の羽生善治（1970～，選手権3期に由り94年九段）は、89年の選手権戦初挑戦で最上級の竜王位に就いた頃は段位や実績が上の先

輩と対局する際、上座に坐るべきか下座に坐るべきかと毎局悩んでいたが、翌年の竜王失冠後は選手権保持者に相応しい行動を取れば反感を買っても仕方が無いと考え直した。『決断力』(角川書店, 2006)の「はじめに」でその割り切り方を記した彼は、王位・王座・棋王・棋聖4冠の1994年にA級順位戦で永世名人有資格者中原誠と指す際、<sup>リョウゾ</sup>総当り初参加の順位9位対1位の劣後を意識せず入室後一直線に床の間を背に着席した。46歳の前名人は笑って下座に坐り年齢が自分の半分程度の**若造の掟破り**を見過したが、羽生は次の最終局でも4位の谷川浩司(1962～, 前年度名人位獲得に由り84年九段)に先んじて上座を陣取り、谷川との名人挑戦者決定同率決戦の時も平然と繰り返し流石に気分を著しく害した。谷川も10年前に史上最年少(21歳)の名人と成って間も無い頃の対局で、22歳年上の加藤一二三の上座先着を見て「私の坐る場所が無い」と呟いた。**中学生棋士の史上2人目**(14歳8ヵ月で<sup>フクロ</sup>専業入り)と**元祖との相克は奇妙な因縁**であり、3人目(同15歳2ヵ月)で史上初の永世7冠(2017.12.5達成)の羽生も**禁域に踏み込んだ**から恐い。谷川は『集中力』(角川書店, 2000)第1章(同題)第2部「勝負に勝つ能力を伸ばす」の第7節「勝負では、心の乱された方の負け」で、名指しを避けつつ大先輩の挙動を「何百年と続いている名人位の権威を汚す」ものと糾弾した。部屋に入る前に一旦手洗いに行って血が上った頭を冷し、黙って下座に就いた後も怒りを鎮める為に先番の初手を指すのに10分も掛けたから、**将棋界で最も権威有る名人を礼遇しない非常識な行為への名状し難い憤懣**が<sup>よく</sup>能く伝わる。元『将棋世界』月刊(日本将棋連盟発行)編集長の作家大崎善生(1957～)は、「天才棋士は、<sup>ママ</sup>23歳年上の先輩棋士が座る場所にひょうひょうと陣どった——/将棋界を騒然とさせた羽生善治“3連続上座奪取事件”の顛末」(『SAPIO』誌2016年1月号)の中で、当人が誌上で謝罪する羽目と為った3局(全て羽生の勝ち)続発の一部始終を綴り、**伝統文化の作法に背いた非礼・生意気として糾弾する将棋界の憤りの声**を紹介する一方、<sup>あま</sup>朝日本将棋連盟の対局室を覗くと**席次を譲り合う光景が<sup>よく</sup>可く見掛ける**と最初に書いている。偶々<sup>たまたま</sup>序列は私が上だが実績も<sup>キャリア</sup>経歴も全て上である先輩の上座に坐るなんて減相も有りません、と考える棋士は朝一番に対局室に行き逸早く下座に就いてじっと待ち、相手が現れると**恒例行事**の「どうぞ、どうぞ先輩、そちらの席へ」が始まるのだ、<sup>くだり</sup>という件は**碁界でも既視感**が有り『現代囲碁大系・橋本宇太郎 上』の好例が挙げられる。

巻末の第25局(全本因坊・全八段戦, 1951年末, 雁金準一八段対先番<sup>コマ</sup>[込4目半]八段・本因坊昭宇, 持ち時間各10時間, 307手完, 黒半目勝ち)の解説は、題の「孤高の棋士」の通り相手(本姓岩瀬, 1879～1959, 59年九段推挙・追贈名誉九段)を主役を立て、第1譜(1～33)の解説は着手に言及せず専ら「下座を争う」(小見出し)<sup>エピソード</sup>挿話に終始する。対局の前日に雁金は立会人の岩本薫に対して、明日どうも上座に坐らされる様な気がするが、本因坊を下座に坐らせて対局する事は出来ないと言った。その懸念・意向を受けて相談した結果、橋本は翌朝定刻よりずっと早く対局室に行って下座に坐った。「時刻になって、雁金が岩本に連れら

れて部屋に入るなり、“これは話が違う”と言って当惑したが、橋本は頑として動かなかった。/長年孤独だった七十四歳の老棋士。それが二人の本因坊から、先輩として手厚く遇されたのである。」橋本宇太郎は『囲碁専業五十年』(至誠堂, 1972) 第13章「かりがね」の中で、当惑顔をしたが何も言わずに対局した雁金は内心は喜んでいて、勿論本因坊より上座に坐った事ではなく先輩として遇された事が嬉しかったのだろうと記す。20年後に本因坊戦で挑戦者と成った石田芳夫は「林さんの一体何処が強いんですか」と言い放ち、当時三段だった中山典之は『昭和囲碁風雲録』第22章第3節「続々と木谷一門」の中で、「木谷門下の若獅子たちの気概が込められているが、これを聞いたときに私はいささか仰天した。もし、ひと昔前に林海峰が前覇者の坂田に向って、或いは坂田が呉清源に向ってこんなことを言ったら、ただ事ではすまないだろうと」と書いた。22歳10ヵ月で**6歳年上の本因坊から奪冠した俊英の挑発は若手の下剋上の強欲を現しているが**、8年後の棋聖戦で2連覇中の藤沢秀行に挑む時は持ち前の要領の良さで建前の謙遜を一応示し、「秀行先生と番碁を打つのは初めて。建前としてはいい機会だから一所懸命勉強させていただきます、ということでしょうが、本音の方は四分六分とはいかないまでも四・五対五・五で棋聖は私のものでしょう」と述べた(『現代囲碁大系』第27巻『藤沢秀行 下』[本人解説, 京野秀夫執筆, 1982] 第22局 [第3期棋聖戦挑戦手合7番勝負第3局, 79.1.24~25, 先番・藤沢対石田, 175手完, 黒中押し勝ち] 解説「盤石の寄切り」に見える)。

### 対戦中の「眼射」・雄叫びに現れた昭和の碁の血気・敵愾心

羽生善治は低段時代に上目で対戦相手を睨み付けて威圧を感じさせる習性が有るが、加藤一二三は『将棋名人血風録——奇人・変人・超人』(角川書店, 2012)の第1章「永世名人三人、しのぎを削る」の中で、**同類としての理解**を以て「“羽生にらみ”は闘志の表れ」(第5節の題)と肯定している。当人は盤面を集中して読んでいる状態で顔を上げたのに過ぎないと釈明したが、<sup>かつ</sup>曾て睨まれた加藤が局後に指摘すると羽生は「加藤さんにもらんでいましたよ」と笑った。相手に睨まれたらこちらも睨み、出来るだけ目を大きく開いて瞬きしないで相手を見る、という風に反応する彼は不思議に羽生と同時に目を逸らした。睨みたい時間の長さで自分と呼吸が合っている羽生の心中を想像すれば、その睨みは**気合を入れる方法、絶対に勝つ気持の表れ、「戦闘モード」**に為ると推論する。大山康晴もある対局で中座して帰って来た自分を真っ赤になって睨んだ事が有り、恐らく「加藤は、盤面を見ている私の姿から、私が自信を持っているのか、それとも苦しいと感じているのか察しようとしているはずだ。ならば、自分は自信をもって戦っているとアピールしておかなければならない」と思っていたのだろうが、「羽生睨み」も強い気持で戦っている事を相手に伝えると共に、調子を盛り上げようとしているものか、と

述べている。スペインの画家ゴヤ (1746~1828) の絵の猫が睨み合っている緊迫感が引き合いに出されたが、昭和の碁に多い「龍虎相搏つ」死闘の中で敵愾心が漲る睨み付けは数え切れないほど有り、その1例は『現代囲碁大系』第15巻『瀬川良雄・炭野恒廣・久井敬史・橋本誼・石井邦生』(本人解説, 松尾鐘一執筆, 1984) の炭野の部の7局中の第5局に見える。

炭野恒廣 (旧名武司, 1921~86, 63年八段, 追贈九段) は日本棋院関西総本部の中堅で、第3局 (東西対抗勝抜大棋戦第3戦, 1954.1.25~2.2『読売新聞』所載, 炭野武司七段対先番 [4日半込出し] 加納嘉徳五段, 持ち時間各10時間, 184手投了, 白中押し勝ち) の解説「燃える森の石松」に有る様に、本棋戦で西軍の3番手として登場し先ず東軍先鋒の加納 (1928~99, 68年九段) を下した。俱に新春早々の対局とも為れば縁起でも負けたくないし、況して炭野にとっては年齢も段位も下の相手に敗れるなら、「関西は甘いという風評に、一段と拍車がかかる場面である。/ 事実、囲碁欄で“碁打ちにアマ・プロの別なく、それぞれ鼻が高い。東京方の棋士たちは、大阪方といえば、ネギをしょったカモぐらいに考えている”と容赦なく書かれたのである。」炭野は大いに意地を見せ第4戦で「天才とも鬼才ともいわれた」山部俊郎六段を軍門に下し (同第4局, 1954.2.3~16『読売新聞』所載, 255手完, 黒 [炭野] 半日勝ち), 次に本院の面目に賭けて敵の勢いを殺ぐ役で殴り込む藤沢秀行七段を迎え撃つ番と為った。本局 (3.11~12) の解説「三連勝阻止に藤沢登場」の「2 “つぶしてしまえ”」に、「藤沢七段は第一感とばかりに黒69の二間飛び。/ “つぶしてしまえ” / 白70は炭野に吐き捨てられた一着だった。/ “やってきたね。木谷流にこねまわされるか」と有る。黒69は1路控えて「一間に飛んでおくべきだったのか」と反省の色が秀行の顔を襲ったが、第2譜 (63~71) に次ぐ第3譜 (72~92) の解説「白、鮮やかに活きる」に曰く、「捨てゼリフヤボヤキが飛び出ているうちは、まだ精神的な余裕がある。だが、声が消え、時間がたつにしたがって、対局場を襲う雰囲気は、局面の深刻さを反映させて、まず両者の顔の形相が変わる。ひとことで“怖さ”といっても、けっして女、子供に見せられない怖さなのだ。/ それは絶壁で、ドスを握り締めて身構える二人の男の顔でもある。/ 白72のツケから、白74の飛びツケ。一瞬息を呑む藤沢七段。眼鏡ごしに炭野七段の眼が“どうだ”と声を発

図7 東西対抗勝抜大棋戦第5戦, 炭野武司七段 vs. 藤沢秀行七段 (先番, 4日半込出し), 第63~95手, 228手完, 黒6日半勝ち

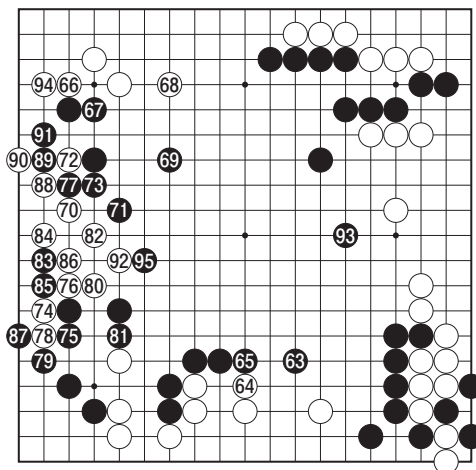


図7 出典 = 『現代囲碁大系』第15巻『瀬川良雄・炭野恒廣・久井敬史・橋本誼・石井邦生』, 「炭野恒廣」の第5局第2~4譜 (100~102頁)。

したように見えた。藤沢の腹部が見る見るうちに鮮血に染まった。」(図7参照)

白74で負けを覚悟した藤沢秀行は1時間近い長考を払って1日目の封じ手の黒75を打った後、左辺の地を失う損が避けられないので盤面を見下ろし容易に立ち去る気配を見せなかった。ところが白は92と見事に活きた直後に黒95の突けを軽視した故に92が敗着と為り(95の1路上が正着)、忽ち黒の中央での大模様の構築を許して<sup>しま</sup>了い228手完・6目半勝ちの結果に為った。左上隅の地に拘泥して黒の中原勢力を過小評価したのが炭野七段の痛恨事であったが、連勝の夢が破れた本局は彼にとって大なる反省・勉強に為った碁であったという論評は、「泣きが入る」とは血戦・決闘の敗北や有り得ない・耐え難い負けを意味することを思わせる。『五人の棋士』の中で坂田栄男だけでなく林海峰も対秀行戦で泣きが入った場面が出るが、「沈黙の勝負師——林海峰」には1965年の名人戦での両者の睨みが描かれている。初戦で上座の坂田は石音高く打った後に手応えを確かめるかの様に上目遣いに鋭く相手を見、林は盤面に目を据えた儘でその一瞥をまるで柳に風と受け流しているかの様であった。戦前の感想で報道機関<sup>マスコミ</sup>に対し坂田先生に教えて戴<sup>つもり</sup>心算で打ちますと優等生的語った林は、3勝1敗で迎えた第5局で1歩も退かぬ気迫を以て必死に覇者交代を阻む名人と激突する。勝負に生きる男を余す所無く<sup>とら</sup>把えようとするテレビ局の異例の2日掛りの全過程撮影の中で、脇役扱いの林は時間に追いつめられた終盤で映像記録を意識せず勝利への執念<sup>あらわ</sup>を顕にする。「あと何分？」/林は、叫ぶように記録係に問かける。「あと十分です」/そして三十秒もたたぬうちに、「あと、何分？」/と、こんどは叱りつけるように訊く。その間、目は盤上に据えられたままだ。「あと、十分です」/「なにっ、十分？」/「九分になりました」/「九分！や、いかん」/林は自分を叱咤するように眩き、はっしと石を打ちおろし、じろりと坂田を見る。見るというよりも、睨みすえるといった感じに近かった。」その睨み据えは坂田の上記の着手の「下段にかまえた剣が一閃して斬り込んだ」感じを帯び、33歳の炭野武司の剣幕や若き羽生善治の「眼射」(造語、眼光人を射る意)とも通じ合う。

加藤一二三は前出著書の第1章第4節「手刀を切った羽生さん」の中で、B級1組順位戦で羽生善治七段が何度も手刀を切る真似に困惑し好局を落した事と共に、変り者と<sup>よく</sup>言われる自分も対局中それと似た形で調子<sup>リズム</sup>を取っていると告白する。加藤の場合は記録係に向って「後何分？」と持ち時間を訊ね、「残り3分です」と答えると10秒くらいして又「後何分？」と訊き、それを繰り返す事で調子を取っているわけである、と書いている。棋士に由ってはそんな調子の取り方を不快に感じる事も有り、現に加藤の「後何分？」に対して「不愉快だから止めさせてくれ」と訴えた棋士が居る。穏便に第三者へ働き掛ける余裕が無く面と向って反撥する極端な行動も起きており、残り時間が紙に書かれて示される銀河戦で加藤が調子を取る心算<sup>つもり</sup>で例の質問を2回した処、相手が記録係に対して「見れば分るんだから、答えなくてもいい！」と言い放った。「すぐに返す言葉が浮かんだが、テレビ対局で、騒ぎが大きくなるのを避けて黙っ



ていた。/そのエピソードをNHKのプロデューサーに話すと、こういわれた。/“それ、ぜひともうちでやってほしかったですね”/NHKの将棋番組は静かなので、たまにはそういうハプニングのようなシーンがほしかったのだろう。」加藤は第13期銀河戦の対阿部隆八段(1967～)戦(2005年5月26日、囲碁・将棋チャンネル放送)で、迂闊にも「待った」を行ってしま<sup>しま</sup>い対局料没収・罰金徴収・出場停止1年の処分を受けた。此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>で相手と同じ險相<sup>けんさう</sup>で不服の反論をしたなら奇人の憎めない失態は又1件増えようが、優勝7回(1960・66・71・73・76・81・93年度)のNHK杯でも超人的な奇態が無くはない。二上達也(1932～2016、73年九段)は日本将棋連盟会長(12人目、89～02)として、NHK杯優勝儀式<sup>セレモニー</sup>の祝辞で敢えて再度戴冠の彼の対局中の伝説化した奇行癖<sup>アマチュア</sup>に触れ、非專業の人が真似をすると困るので儀礼に気を付けて欲しいと苦言を呈した。二上は『棋士』(『日本経済新聞』2000.5.1～31連載「私の履歴書」)に加筆、晶文社、06)の中の専ら加藤を論じる第20章「ライバル」で、その様な仕草は形勢不利の時に出る物で相手にとっては良い兆候だったと述べているが、林海峰の「後何分？」の連発も絶体絶命に陥りかねない時間逼迫<sup>おたけ</sup>の中の呻きや雄叫びに近い。

### 日本碁界の多士済済・奇士多彩と強烈な個性・戦闘的な激情

中山典之は『昭和囲碁風雲録』第19章「呉清源、天下無敵」第2節「高川、本因坊九連覇」の中で、第13期本因坊戦7番決勝第6局(1958.8.21～22)の壮絶な1分碁の記述に続いて、「当時の秒ヨミは、ギリギリの残り一分になると、記録係が、/“三十秒、あと一分です。四十秒、五十秒、五十五秒、五十八秒、お打ち下さい”/と秒を読んでいた。/お打ち下さいと言われたときは既に六十秒を過ぎ、たいていは六十五秒、七十秒。明らかに時間切れなのだが、時間制限は碁の必要悪という観念があり、温情的に“お打ち下さい”の制度だったのである。高川も杉内も、この制度下でうめき声を発しながら死闘を繰り返していたのである」と記す。更に、「この秒ヨミ制度が、現行のように、“五十秒、一、二、三……”と数を読むようになり、“十!”を発声した瞬間に自動的に負けと改められたのは、それから数年の後だが、直接的な動機は、恐らく長老の長谷川章七段(当時)の“秒読まれ対策”であつたろう」と続く。「私なども、長谷川先生の秒ヨミをしたことは多々あるが、/“五十八秒、お打ち下さい!”/と催促すると、長谷川先生は必ず、/“あと何分?”/と反問される。/“ありません。打って下さい”/と応じるしかないが、すると長谷川師、/“弱ったなあ。打たないと切れちゃうよう”/と眩き、漸く石を一粒つまむが、頭の上でグルグル石を回していてなかなか打たない。時間は少なくとも三十秒は過ぎているが、大長老でもあるし、相手の先生は文句を言えない。ただ苦笑して長老の手を待つだけである。」長谷川(1900～87)は木谷實の新布石の実験対象第1号と為った11年後(44)七段に進み、65年引退時に名誉八段が贈与され75～78年に日本棋院理事長(7代目)

を務めた。年功序列を重んじ敬老精神が強い日本の碁界でその我が儘が許されたのも自然な事であるが、「しかしながら、中には気の短い先生もいる。梶和為五段(当時)などはその代表だった。青筋を立て、ムツとした表情だったが、何手か長谷川方式をやられると必ず爆発した。/“記録! しっかり秒を読め!” /記録係も人の子である。何度も怒鳴り散らされると秒読みの声もツイ荒くなり、終盤戦の雰囲気はけわしくなる。/こうして、カウントダウン方式、“十!”で自動的時間切れ制度は生れた。悠長な時代が終わり、機械的、合理的な秒ヨミ制度をこしらえたのは、長谷川長老や梶先輩の功績(?)である。」

長谷川章の最良績の首相杯争奪高段者トーナメント優勝(1959)は**老将の健闘力**を見せたが、62歳時の囲碁選手権戦準決勝進出に由る高松宮賞受賞を最後に棋士人生の栄光は終わった。棋史の語り草と為った「秒読まれ対策」は**長考派・高齢者等の不得手**のほどを実感させ、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』(林裕編著, 金園社, 1983)の【秒読み】の講釈に拠ると、63年12月に規定が改められた後1年の間に時間切れ負けが数局現れた。梶和為(1922~2000, 79年八段, 00年引退・九段)は悠長な時代の終焉を促したが、銀河戦で記録係に怒気を吐く将棋棋士と違って憤慨の言い回しにも**先輩への忌憚**が有った。**次世代の気質の変化**を映して彼の娘婿の武宮正樹は不満を直截に表す**直情径行**の人で、その極め付けは発想・性格とも水と油の様に相容れ難い小林光一との長年の不仲である。『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』第3章「棋士のセンスと人間性」の中で、彼は第1・2節の「プロの条件は“センス”」「美しくありたい」の後に10人の棋士評を記し、「井山裕太」「趙治勲」「本因坊道策」「呉清源」「坂田栄男」「藤沢秀行」「梶原武雄」「加藤正夫」「石田芳夫」に次ぐ最後の1節で、避けて通れない話として対抗意識の由来と確執激化の引金を開けっ放しに語っている。彼は本因坊在位中に自信を持って小林の棋聖位に挑戦する前の抱負を表す際、「地面の下に潜ってばかりいる地下鉄のような碁が棋聖というのでは納得がいかない、だから僕が負かさないと」と口が滑った。**同格の棋士の芸風を公然と貶すのは御法度**だから7番勝負の間に気拙い空気が流れたが、1勝4敗で終わった武宮が数ヵ月後の手合で小林に逆転負けした後の感想戦で事変が勃発した。途中では自分が勝っていたと考える彼は開口一番、「こう打っていたら、碁はもう終わっていたでしょ?」と話し掛けた。勿論「僕の勝ちだったでしょ?」という趣旨なので、「どっちが?」と反問されてカチンと来て、一言も発さず石を片付け対局室を後にし、以来会っても挨拶もしなくなり愛好者も周知する険悪な間柄は10年に亘って続いた。内藤由起子は『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』(水曜社, 2016)3章第7節「木谷の宿願果たした石田芳夫」の中で、木谷實夫人美春(旧姓柴野, 1910~91)の叱りにも承服しない事が有った武宮・小林の「**新人類**」気質の例として、上記の断言に反撥する小林の**恍惚**に武宮は「不愉快だ」と言って席を蹴ったと文句まで書いている。加藤一二三の「後何分?」の連発に対する相手の「不愉快だから止めさせてくれ」よりも烈しいが、戦争体験が有る岳父以上の激越を感じさせた決裂

と初歩的な儀礼も敢えて示さない断絶は、同年の世界戦優勝と照らせば強烈な個性や戦闘的な激情も覇者の条件である様に思える。

1989年1月18日～3月2日に7番勝負が行われた棋聖戦の時期を87年と書いた事は、2013年6月30日発行の同著中の「今年八月に行なわれたロンドン五輪」の誤記と共に、盤上でも細かい計算に無頓着な武宮正樹の大雑把な井勘定を連想させて愉快である。その1987年に本書と同じ出版社が刊した俵万智の処女歌集『サラダ記念日』は280万部も売れ、中の「“寒いね”と話しかければ“寒いね”と答える人のいるあたたかさ」が広く共感された。日本語にも入った中国語の「寒暄」は寒さと暖かさ（「暄」）の意から時候の挨拶をも表し、「寒いね」と話し掛け「寒いね」と答える遣り取りは文字通りの「寒暄を叙す/述ぶ」である。寒暖等の無難な事柄を言語交流の潤滑油にする事は中・日共通の礼法感覚だけでなく、現代日本と並ぶ「紳士の国」の英国及び「国際語」と化した英語でも洗練された作法に為る。囲碁が芸道化した日本では子供教室でも挨拶の習慣から和を尊び人を敬う精神を培うので、武宮が上記著作で反省した様に口も利かない疎遠は「互いに若かった」所為も有り、愛好者への空世辞の意味も含んだ「地下鉄流」発言は「大人気なかった」かも知れない。武宮は俵より1日の差で1回り年上（1951年元日と62年12月31日の生れ）に当るが、若輩の「新人類」女性歌人が叙情の秀作で表した日本人社会の「美しくありたい」気風は、一日の長ばかりか1回りの長が有る彼の人生の先輩には一時的にせよ実行し切れなかった。『1989年版・囲碁年鑑』（『棋道』5月号臨時増刊号）の回顧記事「小林，“頂上”防衛で四連覇 第13期棋聖戦（読売新聞）」（藤井正義）は、小林棋聖・名人・碁聖と武宮本因坊・富士通杯優勝者の「日本一と世界一の対決」に就いて、先ず性格も棋風も両極端で全く肌が合わない両者の対立とどこちない接し方に目を向ける。「七番勝負の前など、二人仲良く並んだ写真が新聞や雑誌に紹介されたが、こんな場合でも、決して言葉を交わしたりはしない。視線が合いそうになつたりすると、どちらともなく、さりげなく目をそらしてしまう。対話と言え、局後の検討のときだけだ。」孤独を好み対戦前に散歩で調子を整える小林と対照的に武宮は「碁界随一のネアカ人間」で、気が向けば対局前夜は勿論1日目の打ち掛けの夜でもカラオケで得意の喉を披露したりする。地に辛い小林の実利派と中央に厚味を築く武宮の宇宙流も正反対である事も有って、反撥し合う2人の7番勝負は面白くないわけが無いと『読売新聞』記者の藤井（1932～）は書いた。頂上対決は平成発足の11日後に前年からの世界戦時代らしく紐育で幕を切って落したが、昭和生れの国内覇者と世界王者の在り方は日本碁界の多士済済と奇士多彩（造語）を体現し、その「反目勝負」（「半目勝負」を振った造語）は囲碁王国を盛り上げた先人を彷彿させる。

武宮正樹が挙げた古今名手の10人中に昭和中期～平成初期を賑わした2組の好敵手が居り、最初の坂田栄男と藤沢秀行は犬と猿の仲で対局室入りの瞬間から目を合せない事も有った。作家近藤啓太郎（1920～2002）著『勝負師一代 囲碁専門棋士の実態』（ぶっくまん、1976）の

第4章に、一言も言葉を交さず憎しみを表情・態度に剥き出し合う両者の遺恨試合の様相が書かれ、第5章に「熱気と殺気が充満していた」対局室の「鉄火場の雰囲気に近いもの」の現れとして、「坂田は屢々藤沢の顔を睨みつけた。藤沢もまた、坂田に対して嘯くような顔をして見せた」と有る。最高位戦の争奪で対抗意識を燃やしていた1960年頃に秀行の対局後の検討に坂田が加わり、何でもズバズバ物を言うその意見がある場面で秀行と対立し双方とも自説を譲らない。高川秀格は『秀格烏鷺うろばなし』第6章「不滅の九連覇」第5節「一番願いましょうか?」の中で、「私など、強い人にこうだといわれれば、なるほどそういう考え方もあるのかと、半分だけは自説をゆずる方だが、彼らはそんなことはない」と語る。議論の際に執拗な坂田に対して性格があっさりしている秀行は面倒になったのか、坂田の正面に向き直り「何なら、一番お願いしましょうか!」と言い放った。この対話を耳にしていた高川は冗談や諧謔で言っているのではなくなかなか迫力が有ったとし、坂田に腕で来いと挑戦できる人は碁界に何人居るか秀行の芸に対する自信を讃える。

『昭和囲碁風雲録』の前出の「秒読まれ対策」と秒読み方式改革の同じ節の内に、第15期本因坊7番勝負(1960.4.22~6.23)に挑戦した藤沢秀行に就いて高川秀格の素描を引用し、「私、中山もたまたまこの秀行がケンカを売った場面に居合わせた。そして秀行の“何でしたら、この局面から一番お願いしましょうか”とひらき直ったセリフを聞いている。サアどうなるか。雨か嵐か。私はそれとなく坂田の反応をうかがった。坂田全く無視。しばらくして坂田が去ったが、お互いに“この野郎”と思ったことだろう。この時から二、三年の後に両者は名人戦挑戦手合で激突するが、あの烈々たる敵愾心、火の出る様な闘争心はこうして徐々に蓄積されて行ったのであろう」と述べている。中国の棋士も見解の相違が生じた時に「この局面から行ってみようか」と言う時が有るが、あくまでも切磋琢磨の為の検証作業であり挑戦状を叩き付ける様な不穏は考えられない。旧名人戦での両古豪の激突は秒読み制度の厳格化で牧歌的な時代が終焉した年に相応しいが、自負の強い2人の決勝最終局に歴史的な鬼手が出たのは囲碁・棋士の相克相生の妙である。近藤啓太郎は前出の第5章で武宮正樹と石田芳夫が将棋を楽しむ光景から2人の日常的な友情を感じ、戦いはあくまでも盤面で鎬を削り合う事だと割り切った彼等と違う坂田栄男の冷厳を描く。碁打ち同士は競争相手だから絶対に友達に為れないと断じた坂田の他者と断絶する態度は、人間的にも敵対する烏鷺の争いで他者と隔絶するほどの怪力を生み出した節が有る。

### 昭和の争碁の野性・雅量の両立と「懸命流→賢明流」の転換

第1期旧名人戦総当り最終局(1962.8.5~6)で坂田栄男は呉清源の猛追で持碁負けと為り、呉は13人参戦の78局中の唯一の持碁に由って勝ち星の価値が同率の藤沢秀行より低かった。

最終戦で橋本昌二に負けた後自棄酒で乱酔した秀行が柵から牡丹餅で名人と成った僥倖は、前年に苦節 10 年で本因坊位を奪い史上初の 7 選手権制覇をした坂田には勿論面白くない。捲土重来の第 2 期では最終戦 (1963.7.5~6) で呉を破って 6 勝 1 敗で挑戦権を獲得し、7 番勝負第 1 局 (8.4~5) でも僅かな優位を守り切る形で 242 手完・黒 1 目勝ちを取めた。坂田と親しい近藤啓太郎の『勝負師一代 囲碁専門棋士の実態』の第 4 章にも見える様に、主催の『読売新聞』で翌日「坂田本因坊まず一勝/囲碁名人戦、一日の差」の見出しで結果を報じた処、挑戦者が当り前の勝利を得た様な語感も有る故に秀行は怒心頭に発し新聞社に抗議した。三好徹は『五人の棋士』第 3 篇「八方破れ——藤沢秀行」(初出 = 『小説現代』1974 年 12 月号) で、普通「坂田、先勝」と付けた処を上記の様にしたのは整理部員の技術的な工夫の所産と見る。坂田の勝ちを当然視する潜在意識は無く平仮名交じりの 7~8 字の理想形に沿った処理に違い無いと言うが、本文にも「まず一勝を上げた」と有るから前回の敗者への同情と目下の覇者への尊崇も感じる。縦令「偏向報道」の疑いが読み取れても下剋上を望む大衆心理への迎合とも解釈できるが、過剰反応とも言い切れない秀行の不快は棋士に押し掛かる棋戦の重圧の現れでもある。『朝日新聞』の「坂田九段まず一勝/囲碁名人戦」でも記事中に無い「まず」を使っているし、同月 28 日の「白熱のせり合い朝日プロ囲碁十傑戦/前田、大竹がまず進出/関西棋院勢、相次ぎ敗る」でも、大竹英雄六段が「一線級スターとなった」宮本直毅八段 (本名直道、1934~2012、69 年九段) を破り、「東と西から関ヶ原ならぬ名古屋市にコマを進め」、同じ 1 回戦で前田陳爾九段が宮本と同じ関西棋院の橋本昌二九段を下した結果に「まず」が使われたが、両棋院は「東西冷戦」の対立関係に在ったにも関わらず氣拙い反応が起っていない。

1977 年 11 月 15 日の『週刊碁』(日本棋院・朝日新聞)の創刊号の 1 面の首要記事は、「王座」へ工藤九段まず一勝 「王座」挑戦三番勝負/プロ好みの好局/趙王座に 1 目半勝ち」と題した。歳末を飾る王座戦の結果は工藤紀夫 (1940~ , 76 年九段) が趙治勲を 2-0 で降し、初選手権に輝いた工藤は 20 年後の天元位挑戦で柳時熏 (1971~ , 96 年七段、03 年天元 4 期・王座 1 期の実績に由り九段に飛び級昇進) を 3-1 で破り、翌年に小林光一に奪冠された後 57 歳時の翌々年に挑戦権を獲得し王者復帰戦に出た。将棋非専門五段の腕前を持つ彼は 20 世紀の最後の天元戦決勝を制したなら (実際は 3 連敗)、囲碁非専門五段の大山康晴の王将位防衛時の「ただ脱帽」「59 歳の気力」並みの称賛を得たかも知れない。14 年前の『読売新聞』の「まず一勝」の文言に就いて三好徹は整理部員の苦心を強調し、『聖少女』(1967) に由る直木三十五賞受賞 (68) 後の作家専念までの古巣を擁護したが、「藤沢の感じたように、まずはとりあえず一つ勝っておけ、といったふうなニュアンスが滲み出てしまったことも確かであった」とも認めている。『週刊碁』の「まず一勝」は「先勝」にすれば次の 3 つの 7~9 字の枠内に収まるが、碁界で有名な秀行激怒の教訓が示した危険性を顧みず創刊号の第一声に掲げたのは、三好が力説した見出しの要件に有る「読者にうったえる」ことを手掛りに考えれば、先ずは取り敢えず 1 つ勝つ

ておけという**大勢の囲碁人の期待**を汲み取った節が有ろう。

『昭和囲碁風雲録』第8章「史上第一の名局——本因坊秀哉対呉清源」の第1節「呉清源、本因坊秀哉に挑戦」の冒頭に、本因坊名人との記念碁を打つ名誉な権利を争う日本選手権手合の様子が詳しく記している。精鋭16人に由る**勝拔戦**は互先<sup>トーナメント</sup>込出し<sup>コミ</sup>制ではなく段位に由る手合なので上級者は不利であり、<sup>コミ</sup>込無しの白番で新鋭に敵わない古豪の敗退は1・2回戦で続出した。「準決勝に勝ち残ったのは、やはり若手の実力者たちばかりだった。橋本宇太郎二十七歳。木谷実二十五歳。関山利一同じく二十五歳。呉清源二十歳。これはいずれも数えどしたが、当世風に満年齢を用いると生まれ月の関係で話がややこしくなるから、ここでは比較のために敢えて古流を用いた」と中山典之は便宜的な記述法の効率性を説いているが、本稿では**国際比較の為に史実発生時の満年齢を基準とし極力精緻な記載を追求**するので、当時の橋本（1907年2月27日生れ）は26歳、木谷（同1909年1月25日）は24歳、関山利一（同年12.23）は23歳、呉（1914.6.12）は19歳であったとする。先行の利の有無は別として**若者が上位を占めた結果は昨今の世界戦を先行した感**が有るが、同年の秋に新布石を試みた木谷・呉の対決は2回戦から同じ五段に進んだ後者が勝ち、8年後に初代実力制本因坊（雅号利仙）と成った関山四段は途中で五段に昇った橋本に敗れた。関山は後に橋本<sup>きか</sup>麾下の関西棋院に帰属し大阪に骨を埋めた（1958年九段推挙、70年歿）が、橋本は全て白で長谷川章四段・前田陳爾五段と関山を連破して当るべからざる勢いを見せ、2回戦で木谷に阻まれた瀬越憲作の両弟子の決勝戦も**因縁の組み合せ**として注目された。

持ち時間各11時間のこの1番勝負（1933.8.30）は245手完・呉清源の白2目勝ちと為り、『現代囲碁大系・橋本宇太郎 上』の第9局の「痛恨の譜」（解説の題）が本局である。彼は黒番を引き当てた時「天運我に在り」の気分の高揚から無意識に「しめたッ」と思い、絶対有利の先番で確実に勝とうとする心構えで緩みに緩んで最後に呉に追い抜かれた。50年に余る棋士生活の間に負けた大事な碁の中でこの1局ほど心残りになった物は無く、相手が誰であろうとああいう気持では勝てないと本人は後悔・反省している。第7譜（133～163）の解説「泣きが入る」では敗北は自分に負けた事に他ならず、「私が黒に決まった時、この勝負はついていた」とまで**痛烈な自責**を続ける。「棋士の間に“泣きが入る”という言葉がある。この碁は、橋本に大きい泣きが入った碁であった。」次の第8譜（164～200）の解説「大きな狼火」は**泣きが入っている処の悲喜劇**から始まり、「対局場の箱根から東京に帰ってくると、主催紙読売新聞の正力社長が橋本の手を握って、“ありがとう。よく負けてくれました”と礼を言った。変な挨拶である。悔しさ、後悔、自分自身に対する腹立たしさでいっぱい橋本は、その言葉にムツとした。」内務官僚を経て読売新聞社を買収して社長に就任した正力松太郎（1885～1969）は、『昭和囲碁風雲録』第3章「院社対抗戦」の第1～3節「院社対抗戦の勃発」「院社対抗戦の舞台裏」「慧眼、正力松太郎」の詳述の通り、同年に創設した日本棋院と棋正社の対立を利用して秀哉

72（270）

対雁金準一の総帥争碁を催し、僅々5万の発行部数を一挙に3倍に伸ばし三流紙から一流紙の仲間入りへの脱皮が出来た。9年後の選抜王者对本因坊の名人勝負碁もこの仕掛け人が企画した一世一代の<sup>イベント</sup>大行事で、新旧・老若・日中対決と為る世紀の<sup>カード</sup>組み合わせの実現は彼及び碁界に天運有りと言えよう。

彼の<sup>か</sup>商業主義の塊の露骨な喜色満面と常識外れの謝辞・握手に腹立った橋本宇太郎は、これで碁界が沸き立ったのだから結果的には良かったと後に大乘的な見地から述べた。彼は四段時代の1928年9月に師命を帯びて北京で呉清源と試験碁を2局打ち、その時に<sup>ものみゆさん</sup>物見遊山の気分に入り全力を出せず負けた事は晩年になっても残念がっていたが、中国の神童の導入と今回の国際戦の実現に対する貢献は後世に語り継がれて行くものである。『世界最強の囲碁棋士、曹薫鉉の考え方』の「二段 良い考えは良い人生から生まれる」の第3節「人格は教えることのできないもの」に拠ると、瀬越憲作が橋本の次に呉・曹を弟子にしたのは囲碁伝来の中国・朝鮮への恩返しであり、又その一流に成れる者しか採らない方針はたった3人の弟子の大成に由って見事に実った。日本・世界の囲碁国際化の祖と言える瀬越の布石は自ら発掘した呉の来日・入門の60年後、富士通杯・応氏杯の発足に由る日・中・韓3強世界争覇時代の到来で大模様を形成させた。生誕100周年の1989年に曹が応氏杯で優勝し翌年に孫弟子の林海峰も富士通杯で戴冠したが、瀬越の3弟子の国際色・異色は俱に日本棋院から離脱した(呉は一時的)事にも現れる。本因坊昭宇は日本棋院の一方的な本因坊戦制度改正に憤慨して関西棋院を立ち上げ、分派を断固許さぬ中国・韓国・台湾の碁界では有り得ない総本山の対抗勢力を結成した。本因坊位は秀哉門下の最優秀者が継承する私的な名跡から毎日新聞社→日本棋院に譲渡された後、日本棋院所属の棋士でしか継げないと規定されたので橋本は失格と為って仕方が無いが、規約を楯に剥奪するのではなく堂々と戦って取り返そうとする実力本位の正論が通り、日本棋院の雅量のお蔭で坂田栄男との世紀の大争碁、橋本の「昇仙峡の逆転」が生れた。

『週刊碁』創刊号の第1面と同じ見開きに在る第24面を埋め尽した「人」の特集記事は、大きな近影で飾った「勲三等旭日中綬章 橋本宇太郎九段 / 炎々と燃える心の火」である。高川格に由る本因坊位奪還の四半世紀後の日本棋院機関紙創刊号の橋本礼賛の背景には、両棋院の関係改善や力関係に由る余裕の他に碁界の荣誉と為る受章や棋聖戦挑戦の殊勲も有ろうが、1面の冒頭に踊り出た王座挑戦者の工藤紀夫の後の「中高年の星」の名声と合せれば、「まず一勝」は中高年が多く新王者誕生を見たい囲碁人の琴線に触れる効果も想像できる。規定の最終局まで行く<sup>フル・セット</sup>完全試合を望む愛好者の心理からも格下の方の先勝は歓迎されるが、時の碁界随一の激情的な悔しがり屋の趙治勲が藤沢秀行と違って立腹しなかったのは、好悪の感情より得失の勘定を重んじる当代の合理主義も一因と為る進化を感じさせる。「坂田、まず一勝」が癪に触った秀行は3-4で負け名人位奪還まで雌伏8年を強いられ、坂田の昇仙峡の逆転負けの誘因には打ち掛けが12分遅れた事で怒った事が有る。橋本は『勝負のこころ』(浪波社、1970)の第

1章(同題)第1篇「わたしのこの一局」の中で、道が悪い故に立会人の岩本薫が遅刻した偶発的な事態の結果に就いて「憤兵は勝たず」(第2節の題)と言ったが、自滅を招き易い坂田・秀行の凶暴な怒気と繊細な神経は趙治勲どころか橋本にも無かった。橋本は対呉清源の日本選手権手合決勝の第4譜(46~79)の解説「地味な局」の中で、150~160手で大寄せに入る碁すら少ないのに本局は只の50~60手から寄せに入っており(図8参照)、通常なら勝敗が決る中盤の争いも無くこの何とも恐れ入った渋い細碁は減多に無いと語る。高度の緊張を強いる大寄せが続く第5譜(80~102)の解説「絢爛と平淡と」では、執筆者は華やかで変化の多きこと電雷の如き碁が得意な2人のこの渋さの正体の形容として、

「絢爛の極平淡に至る」という北宋の文学者・書画家蘇東坡(1036~1101)の言葉を借用した。絢爛たる表現を追求して究極が平淡な表現に落ち着くという逆説は困碁にも当て嵌まり、坂田と対極的な「平明流」の高川格が「火の玉」昭宇から本因坊位を奪ったのが好例である。呉・高川・林海峰・石田芳夫に由る「懸命流→賢明流」(造語)の主流転換の延長線上に、平成の碁界では平穩・恬淡な感じが増し昭和の碁・棋士の絢爛豪華の一面を思わせる。

### 傷心・悔恨の後に奮起・成功する強豪の「くさりてらくきたる苦尽甘来」の物語

『現代囲碁大系・橋本宇太郎』上・下巻の解説には呉清源に対する称賛が量・質とも凄く、7歳年下、入門・入段の8年・6年後輩の弟弟子に最大の敬意を持つ純情は感動的である。日本選手権手合決勝の「1天運我れに在り」に次ぐ第2譜(15~25)の「非凡な着想」で、地に辛い白10の変った位置に窺える呉の研究心の旺盛さと発想の奇抜さの典型例として、来日の翌年に木谷實との対局で初手を天元に置き後は相手の真似をした事が挙げられている。第3譜(26~45)の解説「未曾有のこと」も大半の紙幅をその件の紹介・弁護に割かれ、「第一着を天元に打ったのは、天文学者でもあり棋士でもあった渋川春海が最初、それ以降明治に至るまでに何局かあって、呉清源の創始ではないが、そのあとを相手の真似をしていくというのは未曾有のことであった」と書いてある。対戦相手だけでなく碁界全体がびっくり吃驚・当惑もし、先ず最後ま

図8 日本選手権手合決勝、呉清源五段 vs. 橋本宇太郎五段(先番)、第1~79手、245手完、白2目勝ち

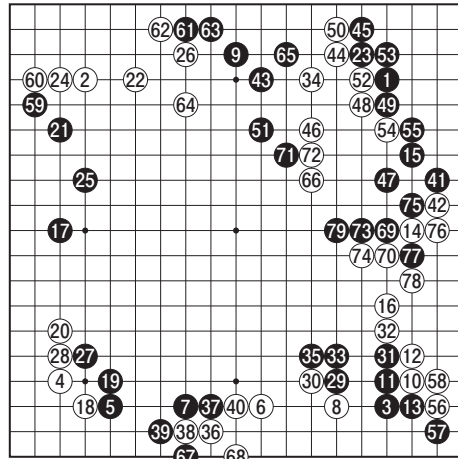


図8 出典 = 『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎上』第9局第1~4譜(83~86頁)。



で真似を続けた場合の結果も分らないし、次に相手に対して失礼ではないか、という意見が出た。呉は前日に橋本にこういう真似碁が失礼に為るのかと訊き、盤上何処に打つても可いから構わないだろうと言われたから決行したのであるが、彼の異質な思考様式も囲碁の本質に符合する橋本の闊達さも碁界の既成観念と衝突した。『昭和囲碁風雲録』第6章「中国の天才、呉清源現る」第4節「第一着天元のマネ碁」に拠ると、流石の「怪童丸」木谷も仰天して何時までも平然と真似をする呉に遂に憤然とし、観戦記者を廊下に連れ出して「どうする？」と詰問すること再三に及んだ。呉は疑問手とされる黒65で真似を止め(図9・10参照)木谷は正しく対応し3目勝ちしたが、瀬越憲作は弟子が負けて良かったと思ひ、勝っていたら問題に為つたらうと感想を漏らした。

図9 時事新報手合、1929年6月4~24日、木谷四段対呉清源三段(先相先・先番)、第1~63手

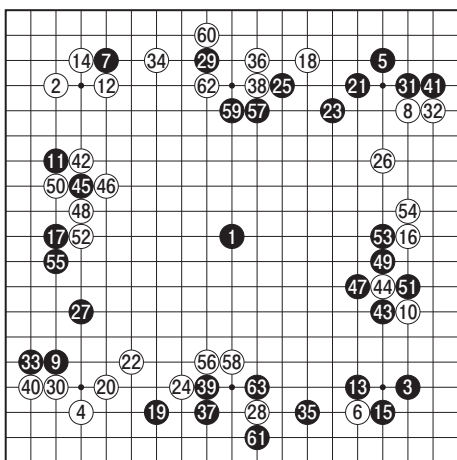


図10 前局、第64~84手、282手完、白3目勝ち

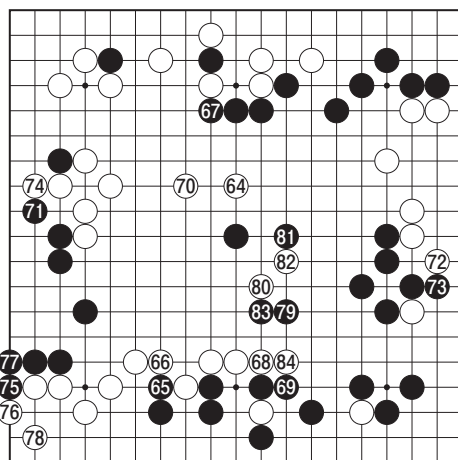


図9・10 出典 = 『現代囲碁大系』第8巻『木谷 上』第5局第1~4譜(51~55頁)。

負けて良かったと内輪や関係者から親身を以て言われた日本碁界の稀有の例として、六段時代の趙治勲が日本棋院選手権戦5番決勝(1974.12.25~75.2.6)で敗れた時の事が有る。2連勝後3連敗で終了した後「趙君は負けて良かったよ」と坂田栄男選手権者が言ったが、彼は「昇仙峡の逆転」の苦杯から強くなったから能く「泣きが入らなくちゃ」と口にした。兄の趙祥衍(1941~ , 63年日本棋院飛付二段, 75年四段, 2007年六段・引退七段)も、弱者や敗者に肩入れする判官鼻頂の気持から韓国で悲劇の英雄として人気上昇したから、負けて良かったと真面目に言い当人を苦笑させた。『現代囲碁大系』第43巻『趙治勲』(本人解説, 村瀬利行執筆, 1983)の巻末論考「趙治勲 運命を切り開く」(村瀬)第2節「泣きが入る」に此等の史実が記してあるが、30局の内に収録したこの5番中の1局は選りに選って泣きが入った

第4局 (1.27) である。「放心の大ボカ」と題する解説の内の最終譜 (169~181) の「9 何という手を」に、「鍋に入れていた」勝利目前の土壇場で起きた信じ難い見損じの白 174 と正着が示されており (図 11・12 参照), 趙はこの手拍子ですっかり熱くなり黒 181 の連絡・生還を見て闘志が失せた。白いからへと先手で寄せれば半目勝負だったのにもうこの碁を見たくもなく、「何という手を。ひどい」と真っ赤な顔は今にも泣き出しそうだったから正に泣きが入った。痛恨の自滅で初めて味わう敗北感に、思い出しては涙が零れる日が暫く続いたと村瀬は言うが、自戦解説中の大失着の修飾語の「青春の一ページを飾る」は人生に於ける意義を表している。坂田はその時「君はまだ若い。これからがある」、「じりじり強くなっていくのが本当に強いんだ」と言ったが、「昇仙峡の逆転」の敗局を本叢書の自選代表作<sup>シリーズ</sup>に入れた坂田と同様「泣き」を糧にした趙は、大先輩の様に雌伏 10 年の羽目に陥る事無く 2 ヶ月余りに初公式選手権戦戴冠を果たした。

図 11 第 22 期日本棋院選手権挑戦手合 5 番勝負 第 4 局, 坂田栄男選手権者・九段 (先番, 4 日半<sup>コミ</sup>込出し) vs. 趙治勲六段, 第 173~181 手, 181 手完, 黒中押し勝ち

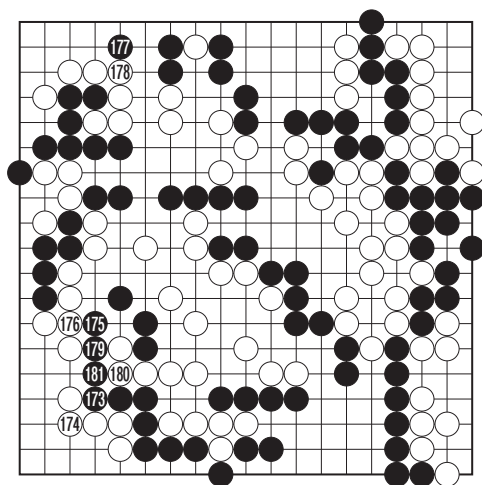


図 12 趙治勲が局後に示した前譜の白 174 の失着理由 (白 1 と打てば, 黒 2 の切りに, 白 3 以下 9 まで手に成らない)

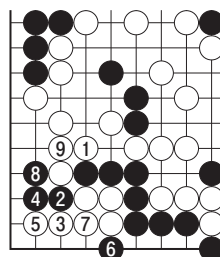


図 11・12 出典 = 『現代囲碁大系』第 43 卷『趙治勲』第 9 局第 9 譜・10 図 (81 頁)。

第 3 局を決め損ねた時に前期の加藤正夫対坂田栄男の 2 連勝後 3 連敗の再演の予感が現れ, 趙は坂田の必死の気魄に押えられた様に痛恨の大失着を打ち最終局も冴えずに敗退した。中山典之は趙を高川格・石田芳夫・小林光一と共に最初の機会をものにした棋士に挙げたが, 趙は 1973 年に第 5 回新鋭トーナメント戦で初の選手権を獲得し (決勝戦の 6 月 25 日は 17 歳と為った 5 日後, 奇しくも相手の羽根泰正八段の 29 歳の誕生日), 69 年以來の大手合 33 連勝の記録を作った後, 主要棋戦の初挑戦では中山の譬えて言う「リーチ一発ツモ」の不成功も経験させ

られた。麻雀（発祥地の中国では「麻将」[májiàng]）は多くの棋士が息抜きで楽しむ頭脳遊戯であり、毛沢東が世界に対する中国文化の3大貢献に算えた<sup>10</sup>ほど技・運を競う独特の面白さを持つ。『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』の前出の章節に、勉強に来た曹薫鉉の誘いで武宮正樹・小林光一が雀荘に通い「道場の母」に怒られた場面が有る。木谷實は碁ほど面白い物が無いという考えから道場で酒・煙草を厳禁し専念を要求したのに、武宮は美春夫人の「説教」に対して「麻雀やって、何が悪いのですか」と能く抵抗した。3人とも世界王者に成った事は呉清源の腕の強さと共に麻雀の有益性の証と見做せるが、「泣きか入る・世界の王者・麻雀」から『五人の棋士』の「沈黙の勝負師——林海峰」の話の思い起す。第9期名人戦第6局の2日目（1970.10.17）に藤沢秀行が林から奪冠した直後の対局室で、盤側に寄った大竹英雄が1時間に亘る検討の間に「どうかしているよ、林ちゃん」等と、同年齢の親友の立場から兄貴が弟を叱り付ける様な口調で何度も言った。駄目を1つ勘違いして好局を落し失冠した林に泣きが入っている処、敢えて激しく責める大竹の胸中に友情が満ち溢れているのを三好徹は感じ取ったが、秀行が祝杯を挙げるべく別室へ行った後に大竹が林を麻雀に誘ったのも友情を感じさせた。

立直（[中国語、lìzhí]、聽牌 [同、tīngpái]）を宣言すること。和了った場合、得点が倍に為る）一発（立直を掛けた後1巡以内に和了した場合に成立する）自摸和（中国由来の麻雀用語 [原語の発音は zìmōhú、日本語では「ツモホー・ホー」が標準的]、卓上に積んである牌から1枚を持って来ることに由って和了ること。又、その宣言）に成功する事は、**囲碁より多い運の要素に左右され勝ちながらも棋士の「一撃大成」の形容に適し得る**。世界戦では「初物食い」の武宮正樹・曹薫鉉の「立直一发自摸（和）」に対して、林海峰・趙治勲・大竹英雄・小林光一（優勝順）は最低2巡以上和了が出来なかったが、趙は林の5年後に泣きが入った日本棋院選手権挑戦敗退の後1巡も待たずに、第12回プロ十傑戦決勝5番勝負で加藤正夫八段に3連勝した（4月10・21日、5月1日）。「苦尽甘来」（苦去りて楽来たる）を示す様に、上記の対坂田栄男の敗局の次が「兄弟子を圧倒」（第10局の解説の題）の最終であり、史上最年少の選手権者の誕生と韓国出身者の奪冠が懸るこの1戦に内外の報道陣が大勢集まった。同棋戦はアマ十傑戦出場者の人気投票に由り選出された上位棋士16名と予選通過者4名が出場し、最終回と為った今期は1回戦種子の権利が付く1~8位が石田芳夫・坂田・林・大竹・藤沢秀行・橋本宇太郎・高川秀格・加藤正夫で、趙は9・10位の武宮・橋本昌二等と同じく自力で2回戦に上がらなければならなかったが、前回16位だった彼の加藤（8位）を下した優勝は衆評が当てに為らない事を証明した。昭和45~50年に林・加藤・趙を退けた秀行・坂田の威力は「40代後半=壮年」の現れで、逆に趙の挑戦未遂直後の奪冠と加藤の翌年の初選手権2冠獲得は若手の回復力を示した。中国碁界でも「回血力」（失血後の自己再生能力。回復力）の速さが若手の強みとされるが、趙が26歳時の棋聖位初挑戦で57歳の秀行の7連覇の夢を砕いたのも回

復力の差が大きい。

趙治勲は攻めを身上とする加藤正夫と真面<sup>まとも</sup>に喧嘩碁<sup>ひね</sup>を打ち捻り合いの末 188 手で投了させたが、子供の時さんざん遣られた借りを今返したという感想は木谷實門下の新王者らしい。『現代囲碁大系・趙治勲』の巻頭を飾る「名人を夢見て」（解説の題）の第 1 局は、来日した翌日の木谷一門百段突破記念大会席上早碁（1962.8.2）の対林海峰六段の 5 子局である。6 歳で棋歴 2 年・非<sup>ア</sup>専<sup>マ</sup>業五段の彼は 118 手で中押し勝ちし天才少年の利器を見せたが、前日に入門した道場では後に 9 歳年上・3 年先輩の加藤に星目まで打ち込まれ悔し涙を流した。星目（井目・聖目）は下手が予め碁盤上の 9 つの星（目の上に印した黒点）に石を置く 9 子局で、道場の競争促進型の手合は 1 番手直りで負ければ置石が 1 つ増える（勝てば減る）から、趙は生真面目で手加減しない加藤に負かされっ放しで屈辱的な大差を付けられたのである。『それも一局——弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ』1 章「大竹英雄と木谷實の奇縁」でも、「大竹英雄の入門」（第 2 節の題）の経緯に井目碁を打たされる側の悲哀が綴られている。福岡県北九州市出身の大竹は棋歴 2 年の 9 歳時に已<sup>すで</sup>に『西日本新聞』に取り上げられたが、同年（1951）に呉清源対藤沢庫之助戦の立会で福岡を訪れた木谷は実業家の紹介で指導碁を打つ時、「井目置きなさい」と級位者扱いの言い付けをした。非<sup>ア</sup>専<sup>マ</sup>業では相当<sup>レ</sup>の水<sup>ベ</sup>準<sup>ル</sup>に達していた大竹はカットとして盤上の白を皆殺しに行ったが、感情的な精神状態では普段通りの実力が出せず逆に皆殺しに遭い黒石が全て死んでしま<sup>しま</sup>った。6 章「尾の跳ね上がった鯛 宮沢吾郎」第 6 節「大好きな木谷先生は神様」に拠ると、大竹の 7 歳下・10 年後輩の宮澤（1949～，92 年九段）の入門記念指導碁は 4 子で少年の 4 目勝ちだから、非<sup>ア</sup>専<sup>マ</sup>業強豪にとって相手が専<sup>ア</sup>業の大御所でも 9 子局は耐え難い不平が感じられる。院生時代の宮澤は 5 年先輩の春山勇（1946～，84 年九段）に 8 子まで打ち込まれたが、林に及ばない加藤に 9 子もの格差を強いられた趙の遣り切れない気持は痛いほど分る。翻って、大竹は井目碁だから平常心を失って全滅し悲憤の余りその場で号泣したが、木谷はその根性を認めて即座に面倒を見ようと言い出したので結果的に負けて良かった。泣きを入れなくてはという坂田栄男の持論の通り多くの中国の棋士も泣きが入る事で成長し、年齢・性別・段位を問わず傷心・慟哭の後の奮起・成功の伝説が枚挙<sup>いとま</sup>に暇が無いが、泣きが入った坂田等や泣きで入った大竹と照らせば「碁神」呉清源は「泣き」と無縁である。

附記 本稿では多くの文献・著述者等を紹介する意図から、出処の基本情報を文中に盛り込む形式を基本とする。特に章・節又は局・譜等の所在を示した場合、煩雑を避ける為に注で頁<sup>ページ</sup>を記す事を省く。

猶、注 5・9 は執筆・校正の時間の制限に由り、無数の既読資料の山から最適の例や出処を見付ける事が出来ず、精査・補足を要する暫定的なものである事も断って置く。本稿両筆者の論文「囲碁の“酷”と人智の“魔”——究極の頭脳競技<sup>ゲーム</sup>の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup> 4 強の特質・行方 (2)」(本誌 29 巻 2 号 [2016.10] 1~56 頁) に、「(前略) 武宮も道策に傾倒したが、天才肌の彼も木谷道場で棋譜並べを数多く重ねた結果右手の人差し指の爪が薄くなった<sup>198)</sup>」(太字は原文)と有り、注 198 は

「2014年11月15日の“Yahoo! Japan 知恵袋”に、囲碁の強い人は石を持つ右人差し指の爪が雲母の様に薄くなっているという伝聞の裏付けを求める質問が出た[“miwako1999”より] 処、武宮正樹九段が木谷道場で修業していた時そうだったと本で読んだという回答が寄せられた[“minoruy4910”より]。筆者もテレビ棋戦解説等で曾て棋譜を沢山並べて爪が割れたと言う本人の体験談に接した記憶が有るが、本稿では一流棋士の早年の猛勉強の結果であり得る現象として取り上げて置き、膨大な文献に対する点検で得られなかった確証を引き続き探し後に補完できる様にしたい」と為るが、**囲碁の局後検討とも通じる刊行後の再調査で得た権威有る活字の典拠は**、中山典之著『完本 実録囲碁講談』（岩波書店、2003年）第16話「一瞬の月光」の次の記述である。「**現本因坊、武宮正樹八段は、院生時代に棋書を並べ続け、右手人指し指の爪が雲母のようにペラペラになったと聞く。**」（200頁）**論文も囲碁の対局と同様な「遺憾の作業」の宿命を持つが、件の不完全な注はこの注の再考・訂正の様に後に改善したい。**

注

- 1) 「温家宝到陝甘考察 对下一步抗震救灾提出四点要求」(新華社記者 李斌), 中国共産党新聞網, 2008年6月22日; 「温家宝総理致2003年科技活動周的信」, 中華人民共和国科学技術部網, 2003年5月17日; 「国務院総理温家宝在2011年春節団拜会上的讲话」(2011年2月1日), 新華社(同日)。
- 2) リチャード・ニクソン著, 松尾文夫・斎田一路訳『ニクソン回顧録 第1部 栄光の日々』(小学館, 1979年[原著=78年]), 343頁。
- 3) 「世界冠軍從成都出道 周俊勳:感謝宋雪林老師」(記者 孟武斌), 成都晚報網, 2007年3月23日。
- 4) 賈知若「心中有劍——第11届LG杯決賽現場記」, 『囲碁天地』2007年第8期, 56頁。
- 5) 「敗者為王(三) 勤能補拙, 大智若愚」, 奕客囲碁網, 2017年9月18日。
- 6) 楊燦「春蘭冬日綻放」, 『囲碁天地』2015年第2期, 3頁。
- 7) 楊燦「国手二十 閔兵95後・鼎爺有多強」, 『囲碁天地』2015年第4期, 6頁。
- 8) 楊燦「大道三十始」, 『囲碁天地』2014年第17期, 9頁。
- 9) 記者会見の模様等は当時の各全国紙等の報道に拠り、事務局折衝に関する証言の出処は再確認である。
- 10) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』([台北]時報文化出版, 1994年)79頁, 日本語版(新庄哲夫[英語版より]訳『毛沢東の私生活』, 文藝春秋, 1994年)上巻116頁。

夏 剛 (立命館大学国際関係学部教授)

夏 冰 (京都囲碁道場師範)

## 相克相生与荣枯盛衰 ——国际化、人工智能称雄时代中围棋的演变及恒常（1）

具有数千年历史的围棋自 1988 年开展世界职业大赛起进入国际化时代,从此开启日本、中国、韩国、台湾“3.5 强”群雄争霸、相互促进的局面,2016 年又由人工智能的飞跃进步而迎来新纪元。

国际化时代中尤为值得注目的演变,是新兴强国韩国的崛起、发祥地中国的复兴和 400 年王国日本的式微。本文以世界大赛夺冠数为基准,判定韩国、中国先后于 1994、2009 年超越了日本,对照中国围棋百年前受日本影响废除座子制的现代化起步,审视、分析这一世纪大逆转的过程、原因。

本文以日本江户、昭和为世界围棋的两大黄金期,从昭和棋界在战争中的受难和战后的繁荣,及棋手经历挫折后雌伏、奋起而终至雄飞、成功的事例,发现棋史中不乏艰难促使玉成的规律。

将棋手分为“一击大成”、“初击不发”、“隐忍后发”型,试论近期世界性的“35 岁碰壁”现象,联系中国棋手最佳成绩不少呈现于 27 岁左右,指出当代竞争激化、最盛期短缩化,并把能量耗尽、衰退趋向早期化的加速视作日本棋界韩、中化的表现。

对比韩国、中国围棋的竞赛化、重意志和日本围棋的艺道化、重礼法的特征,也注视昭和围棋既充满血性、激情、个性,又有野性与雅量的两立及“拼命流→平明流”的主流转换。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

（夏 冰，京都围棋道场教师）